

# 彙報

二〇〇五年一月より  
二〇〇五年十二月まで

## 班 研究

### 中國美術の圖像學

班長 曾布川 寛

古代、中世の美術において表現されたものは全て象徴的意味内容を有しており、それが何を表しているかを知ることなしに作品の理解はあり得ない。作品の背景には神話傳説、宗教的義軌、社會的情況などがあり、それらを踏まえて理解することが要求される。我々は中國の古代、中世美術を取り上げるに當たり、圖像學の見地から考察を試みる。主たる對象は考古學的出土文物と、石窟寺院などの佛教美術であり、中國のみならず、インド、朝鮮、日本を含めて考察する。班員による研究發表は、以下の通りである。

一月二四日 仙人と「現人神」—吉備塚古墳

出土三疊環頭太刀家紋文様の紹介を兼ねて— 山岸 公基

一月三二日 小景畫小考(續) 宇佐美文理  
二月二日 龍門大奉先寺の發掘について

エリカ・フォルテ

### 王玄策研究

班長 高田 時雄

王玄策は唐の太宗から高宗の時代にかけて、數度にわたり正使あるいは副使としてインドに赴

き、中印文化交流史に足跡を残した。その著とされる『中天竺國行記』は現在では散佚して、『法苑珠林』『諸經要集』『釋迦方誌』などに断片的な記載が見られるのみである。本研究班では、王玄策の使節に関する文獻資料を集成し、讀み解くこと

によって、當時の中國からインドにわたる地域の歴史・宗教・言語・文化などの情報を引き出すことを目的とする。本年は、関連資料のテキスト校訂・譯註整理等の作業をほぼ終え、報告書の作成を開始、二〇〇六年中の刊行を豫定している。なお、二月一四日には、『大唐天竺使出銘』の發見者である四川大學霍巍教授に、發見當時の狀況を聞くとともに、「近年の西チベットにおける考古發見」と題した講演をしていただいた。

### 中國文明の形成

班長 小南 一郎

研究班は、豫定の五年の期間を終えることになったが、王國維「觀堂集林」の讀書を最後まで繼續した。五年間の期間中に讀めたのは、藝林一から藝林五の「爾雅草木魚鳥獸名釋例」までである。「觀堂集林」には、讀めなかつた部分にも重要な論考が收められている。しかし、研究会で讀んだ部分からも、王國維の、中國の古典的な文獻資料と新しい出土資料とを組み合わせる論證する、

中國古代文化復元の方法のおおよそは把握できたのではないかと思う。王國維の方法に對する理解を基礎にして、最近、次々と紹介される新しい資料との取り組みの中から、我々自身の方法論を築いてゆくのが、今後の課題である。

期間中に行なわれた研究班員たちの研究報告をもとにし、一二篇の論文を收めた報告書、『中國文明の形成』が、三月に出版された。

### 中國の生活空間と造形

班長 田中 淡

中國の傳統的な生活空間とそれに直截的に關わる造形を對象とした二年間の試験的研究を結束した。標記の期間に行われた研究發表・會讀等は左記の通り。

二月 八日 『通雅』卷三八 宮室 雖・和高井たかね

二月三二日 『通雅』卷三八 宮室 雖・和高井たかね

三月三二日 廣東省肇慶市東晉墓出土水田耕作模型考—嶺南地方における犁の導入時期の再考察渡部 武

三月二九日 A Brief History of Dough Kneading in China: a Civilization of Manual Skill and Virtuosity 中國麵食文化史  
Françoise Sabhan

### 三教交渉の研究

班長 麥谷 邦夫

本研究班は、中國中世における儒佛道三教間のかかひりをさまざまな角度から研究することを

目的に、二〇〇〇年度から五年間の豫定で組織され、昨年度末をもって終了した。その研究成果は、『三教交渉論叢』（人文科學研究所、二〇〇〇年三月刊）として公刊された。

三國時代の出土文字資料

班長 井波 陵一・富谷 至

本研究班は、當初の目的であった本研究所所蔵の魏晉時代文字拓本の會讀を終え、その成果を『魏晉石刻資料選注』として公表した。『漢代石刻資料集成』にくらべ、會讀した石刻の数は少ないが、『漢代石刻資料集成』にはみられなかった語彙が多く、その索引は早速、新研究班である「北朝石刻資料の研究班」において活躍している。

また、拓本會讀と並行しておこなわれた張家山漢簡・二年律令の譯注作成も終了し、その成果を東方學報に公表した。また來年度には、譯注をまとめ直し、二年律令に關する論文集とあわせて公刊する豫定である。

なお、當研究班で會讀している拓本は、本研究所付屬、漢字情報研究センターHPにおいて公開されている。

\*石刻拓本資料

http://kanji.zinbun.kyoto-u.ac.jp/db-ma-chine/imgsrv/takuhon/

二〇世紀中國の社會システム 班長 森 時彦

本研究班は、清末から現在にいたる一〇〇年間に於ける中國の社會システムの變動を多様な側面から總合的に檢討することを目的として、二〇〇三年四月から五年計畫でスタートした。折り返

し點となる本年は、政治、財政、法律、經濟、産業、情報、風俗など多面的な分野で、若手を中心とする意欲的な報告が際だつた一年であった。本年の報告は左記のとおりである。

一月二八日 「國民黨民主派」の組織化と政治主張——三民主義同志聯合會を中心

竹内 理樺

二月一八日 差委のシステムと「洋務人材」の登用

糸山 大樹

四月二三日 區域政治文化背景下的陝西近代革命運動——以陝西靖國軍爲中心

王 建軍

五月 六日 一九二〇年代の求婚廣告

高嶋 航

五月二〇日 清末の「禮」と「法」をめぐる論争——『大清刑律』編纂問題を中心

田邊 章秀

六月 三日 憲政開始期における胡適の政界参加問題

緒形 康

六月二七日 戦前・戦時期中國電力産業と日本人技術者

金丸 裕一

九月三日 「滿洲國」における「民族協和」論の成立と展開——滿洲侵略と連帶の論理

菊地 隆之

一九世紀アジア諸言語のローマ字化——インドから中國へ

蒲 豊彦

一〇月二四日 一九三〇年代中國紡績業の動向

森 時彦

一〇月二八日 清末北流黃河の政策史的考察

丁寶楨から周馥まで

一月二八日 晚清の閩報與講報

桑 和弘

二月 二日 一九三〇年代の中國土地調査事業について——現存する廣東省の土地調査冊の性格と作成経緯

森 紀子

漢字情報學の構築

班長 安岡 孝一

本研究班の主眼は、漢字テキストをコンピュータというマナイタの上に載せて、何とかテキスト處理できるようにしよう、というものである。研究の對象としては、文字コード、組版、フォント、OCR、WWW、形態素解析、など多くの要素技術が考えられるが、本年は、漢文組版、拓本OCRにおける文字座標抽出、スケルトンフォント技術に關して議論をおこなった。なお、本研究班では、参加者全員が文献や書籍を見ながら論じ合うというスタイルを取っているため、特定の發表者等は記さないことにする。

一月二八日 漢文教授ニ關スル調査報告

佛敎漢文の讀み方

「論語」の各刷における「レ點」の位置

「漢文入門」（一九五七）における「レ點」の位置

「漢文の語法」（一九八〇）にお

ける「レ點」の位置

「漢文の語法」（一九八〇）にお

ける「レ點」の位置

「漢文の語法」（一九八〇）にお

ける「レ點」の位置

「漢文の語法」（一九八〇）にお

ける「レ點」の位置

「漢文の語法」（一九八〇）にお

ける「レ點」の位置

「漢文の語法」（一九八〇）にお

ける「レ點」の位置

「漢文の語法」（一九八〇）にお

ける「レ點」の位置

「漢文の語法」（一九八〇）にお

ける「レ點」の位置

「漢文の語法」（一九八〇）にお

ける「レ點」の位置

ける「レ点」の位置

東書文庫

二月 一日 漢籍國字解全書(早稻田大學)

漢文大系(富山房)

孟子講義(益友社)

新譯漢文叢書(至誠堂)

校訂漢文叢書(博文館)

詳解漢和六辭典(富山房)

國譯漢文大成(國民文庫刊行會)

日本名家四書註釋全書(東洋圖書刊行會)

孟子解説(立命館)

孟子集註(明治書院)

新釋漢文大系(明治書院)

漢文訓讀の基礎(明治書院)

漢文入門(和泉書院)

漢文教育の理論と實踐

『漢文エディタ』

二月 二五日 特集 漢文訓讀の語法『月刊文法』(昭和四四年一〇月號)

特集 漢文訓讀の問題點『月刊文法』(昭和四六年一月號)

漢文エディタ(二〇〇五年二月一日の「中文電腦かわら版」)

電気漢文箱

數研プリント工房國語編

『文書畫像處理の現狀と動向』

『汎用的な文書畫像の階層的領

報 景

四月 一九日

域分割と識別法』

域分割と識別法』

「文字行の局所的な直線性を利用した頑健・高速な文字行抽出法」

五月 一七日

project-O2

ICDAR 2005

六月 七日

ICDAR 2003

“Handwritten Japanese Address Recognition Technique Based on Improved Phased Search of Candidate Rectangle Lattice”

「ストローク情報に基づく手書き郵便宛名の切出しに關する一手法」

六月 二一日

「江戸期版本畫像からの文字切り出しの試み」

「判別および最小二乗規準に基づく自動しきい値選定法」

拓本畫像からの文字切り出し

“New Methods of Pitch Extraction”

七月 五日

Adobe-Japan 1-6 の Unicode

Adobe-Japan 1 の漢字(部首書數順)

人名用漢字官報

OpenType フォントエディタ

OTEdit

FontForge

一〇月 一八日

FontForge のミュー集

FontForge のミュー集

KAGÉ/glyphEditor Macro-media Flash 版

OpenType フォントの仕組み

一月 一日

OpenType Specification v.1.4

The Compact Font Format Specification

The Type 2 Charstring Format

SVG フォント

IS Z 8903 機械彫刻用標準書體(常用漢字)

二月 六日

「ストローク種別に基づく文字形状生成方式」

「骨格ベクトル方式による漢字パターンの生成」

「骨格ベクトル方式による漢字フォントの形状特性」

「漢字スケルトンフォントの生成支援システム」

「プログラム肉付けによる複数漢字書體間のスケルトンデータの共有」

「部品合成による漢字スケルトンフォントの作成」

「プレビュー用フォント作成の試み」

ストロークフォント (Dyna-

Comware)

LCフォントとその周辺

カラー對應液晶フォント

LCFONT C

CLWFKの改良

ビットマップフォントからの

自動処理

班長 淺原 達郎

中国古代の基礎史料  
二〇〇五年からは、思いきって戦國時代の楚國の竹簡すなわち楚簡を読むことにした。とにかく楚簡の文字に慣れて、ある程度は読めるようになることをめざす。

小手調べとして、一月二日から二月二五日にかけて、信陽長臺關一號墓出土の竹書を、李零「長臺關楚簡《申徒狄》研究」を手がかりに読み、その讀書記録は『日古』第四號(四月二日)に公表した。

四月からは、いよいよ郭店楚簡に挑戦。やはり李零「郭店楚簡校讀記」を教材としながら、夏休みをはさんで二月までに、老子甲乙丙本(四月二日~六月三日)、太一生水(六月一日)、語叢四(六月七日~六月二十四日)、緇衣(六月二十四日~九月二日)、五行(九月三〇日~一〇月一日)、魯穆公問子思(一〇月二八日)、窮達以時(一〇月二八日~二月二五日)、唐虞之道(二月二日~二月九日)、忠信之道(二月一六日)と読み進んできた。最初は手探りの状態であったが、徐徐に勘所のみこめてきたので、このあたりで讀書記録をまとめようと、『日古』第五號の

準備にかかっているとこである。

楚簡研究の進展はめざましく、研究の中心は郭店楚簡から上海博物館藏楚簡に移っている。われわれは周回遅れではあるが、無理に追いつこうとせず、しっかりと前を見て走っていくつもりである。

陰陽五行のサイエンス

班長 武田 時昌

陰陽五行説は、物類や自然現象の法則性や相互關係を説明する原理として大いに用いられた學説であり、中國の諸分野において独自の理論構造を生み出すパラダイムのな役割を果たした。これまでの研究においては、陰陽五行説の成立過程や配當説、それを援用した漢代の政治思想等に詳しい考察が試みられてきた。しかしながら、三國時代以降の史的展開や理論構造の特質については、十分な検討がなされていないように思われる。そこで、自然學に限らず思想、宗教から文學、諸技藝に至る多彩な分野において、天人感應、物類相感等を含めた陰陽五行の説明原理が、實際にどのように活用されているのかを分析し、包括的、複眼的な見地からその構造と特色あるいは限界性を考究したいと考えている。

二〇〇五年は、『五行大義』卷一、「醫心方」卷一を會讀し、班員及びゲストスピーカーを招いて研究發表を行った。詳しい内容は左記の通りである。なお、南京中醫藥大學教授の沈農澍氏の講演の折には、同じく茨城大學の眞柳誠氏のもとに來られていた崔爲氏(長春中醫學院助教授)、梁永宣氏(北京中醫藥大學助教授)等も参加しても

らって、『醫心方』や中醫學の最近の動向に関する討論會を行った。

また、それ以外の班活動として、秋以降は『醫心方』に引用された『太素』の佚文を整理するワーキングを開催し、五月二八日、一〇月二九日に杏雨書屋で行われた東アジア醫學史關係の講演會に参加し、終了後班員による會合を持った。

一月二二日 『五行大義』卷一、辨體性 伊藤 圓

二月 五日 見學會 森ノ宮醫療學院鍼灸 ミュージアム

ヨローロッパ訪問歸國報告 東郷 俊宏

二月一九日 『五行大義』卷一、辨體性 石 立善

四月三日 煉丹術の陰陽五行説―『悟眞篇』を読む 加藤 千恵

五月二四日 『五行大義』卷一、辨體性 石 立善

六月 四日 『醫心方』卷一、治病大體第一 武田 時昌

六月二五日 『五行大義』卷二、論相生 東川 祥丈

七月二六日 中醫古籍俗字分化學隅 沈 澍農

九月二七日 『五行大義』卷二、論相生 東川 祥丈

一〇月二三日 『五行大義』卷二、論生死所

武田 時昌  
 一月二日 『五行大義』卷二、論四時休王 加藤 千恵  
 一月二七日 『醫心方』卷一所引『太素』佚文 閻 淑珍  
 二月一日 『五行大義』卷二、論四時休王 加藤 千恵  
 マークアップ―理論と実践 班長 C. Wiltern  
 マークアップという行為はテキストに含まれた、文字で表現されていない側面を明確して、しかるべく記號の記入で、様々な分析、解讀と處理の對象にすることである。この研究班の初年度ではテキストの理論の檢討を出發點として、その議論を経て、後半年から今年にかけて、正倉院文書、『資治通鑑』などの具體的な例を見ながらそのテキストの解讀としかるべきなマークアップの理解を深めた。四月から、この問題を知識表現の側面から整理すると、最近の工學的な研究成果を確認するため、溝口理一郎の「オントロジー工學」を班員での會讀とともに人文科學、特に中國の古典への應用の可能性を議論し續けた。第一・第四火曜日には漢字情報研究センター應接室で開催しているが、研究班の活動と成果はウェブの <http://chw.zinbun.kyoto-u.ac.jp/markup/> で公開。

元代の法制 班長 岩井 茂樹  
 二〇〇四年度から發足したこの研究班は、元朝時代の行政文書・法制文書の會讀をつうじて、その時代の制度と社會について知見をひろめるこ

とを目的としている。参加者それぞれが、會讀の作業のなから研究すべき課題を見だし、この時代の制度と社會の特質を理解する足がかりを得ることを期待している。とくに、前後の時代との連続と斷絶という問題について洞察を深めたい。會讀する資料として選擇したのは『大元聖政國朝典章』禮部の部分(典章二八〇三三)である。すでに、『新集至治條例』所收の記事を含めて、禮部にかかわる部分の會讀は終了した。校訂電子本文の作成および閲覽・檢索を提供するWebアプリケーションを作成済みであるので、禮部の部分については公開し、他の部分については初步的な校正を終えた段階で暫定的に公開する豫定である。今後は、『新集至治條例』所收刑部の記事を會讀すると同時に、研究發表を交えて研究會をおこなう豫定である。二〇〇五年一月〜二月の會讀箇所と擔當者を掲げる。

- 一月二八日 禮制三 葬禮 中島 樂章
- 二月 一日 禮制三 祭祀(一)市丸 智子
- 二月二五日 禮制三 祭祀(二)水越 知
- 三月 一日 學校一 蒙古學 中島 樂章
- 三月二五日 學校一 儒學(一)金 文京
- 四月 五日 學校一 儒學(二)岩井 茂樹
- 四月二九日 學校一 醫學(一)山崎 嶽
- 五月一七日 學校一 醫學(二)森田 憲司
- 五月三二日 學校一 醫學(三)古松 崇志
- 六月 七日 學校二 陰陽學 市丸 智子
- 六月二二日 釋道(總論) 石野 一晴
- 七月 五日 釋道 釋教 岩井 茂樹

- 七月二九日 釋道 道教(一) 水越 知
- 九月 六日 釋道 道教(二) 堤 一昭
- 九月二〇日 釋道 白蓮教 頭陀教 也里 可溫教 植松 正
- 一〇月一八日 釋道 孝節 清水 智樹
- 一月 一日 釋道 行孝 雜例 宮宅 潔
- 二月 六日 新集 禮制 儒教 僧道 八木 毅・小野 達哉

中國近世日用類書の研究 班長 金 文京  
 昨年度に引き続き、『事林廣記』の會讀を行い、譯注を作成した。本年度は歴史關係(節序類)と科學史關係の會讀を交互に行なった。擔當は左記のとおりである。なお「學校類」二と「家禮類」一の譯注を『東方學報』第七七冊に掲載した。

- 五月二〇日 節序類(一月一二月) 水越 知
- 五月二四日 花果類 森村 謙一
- 六月二四日 節序類(續) 水越 知
- 六月二八日 服飾類 武田 時昌・相川佳予子
- 七月二二日 節序類(三月一五月) 有松 志保
- 一〇月二一日 節序類(續) 有松 志保
- 一一月二三日 農桑類 武田 時昌
- 一二月二三日 節序類(六月一八月) 宮 紀子

中國繪畫の總合的研究 班長 曾布川 寛  
 中國繪畫の資料は、發掘に基づく古代・中世作品の出現、傳世する近世作品の公開などによっ

て、近年ますます増加の一途をたどっているが、多くは未消化のまま放置されているのが現状である。この膨大な資料に對して、まずデータベースによる系統的整理が要求され、また多方面からのアプローチが要求されている。本研究班は可能な限り資料を収集し、様式論、圖像學、畫論、技法はもとより、パトロン、蒐集などの観点から考察し、更に書法・篆刻、詩文などの面からのアプローチも加え、総合的な研究を試みる。今年度は前回の共同研究のまとめを併せ行った。班員及びゲストスピーカーによる研究発表は、以下の通りである。なお、ワークショップ「ソグドと中國の東西美術交流」を開催し、下記の方々が発表した。

- 四月二三日 「大唐王朝 女性の美」展（大阪市立美術館）見學  
齋藤 龍一
- 五月一六日 唐代佛教美術の一考察——「大唐王朝 女性の美」展出品と關連して——  
齋藤 龍一
- 五月三〇日 中唐の劉商について——詩人・樹石畫家・道士としての生涯  
竹浪 遠
- 六月一三日 漢唐期の東西文化の交流——ソグドの活動を中心に——  
曾布川 寬
- 六月二七日 任仁發について  
宮 紀子
- 七月一日 半跏思惟像の圖像學的研究——說法圖にみえる半跏思惟像を

- 中心に——  
徐 男英
- 唐代新様式の受容と中國化——菩薩像を中心に——  
金 銀兒
- 一〇月一日 「中國 美の十字路」展（MIHO MUSEUM）見學  
曾布川 寬
- 一〇月一七日 ギメ美術館藏文殊騎獅像について  
張 南南
- 一〇月三二日 北響堂山石窟南洞佛教石經試論  
謝 振發
- 十一月二四日 宋代の三館祕閣六閣における文物の收藏・公開活動の史的意義について  
塚本 麿充
- 十一月二六日 ワークショップ「ソグドと中國の東西美術交流」  
ソグドの圖像資料に關する最近の研究動向——中國出土ソグド人石製葬具とサマルカンド壁畫——  
影山 悦子
- 西域出土の錦について——中國錦における經緯から緯錦への移行プロセス——  
古田 眞一
- 正倉院鹿文銀盤の圖像問題をめぐる一考察——その西方由來の可能性を求めて——  
白 適銘
- 十一月二八日 所謂「紋景的曼荼羅」について  
定金 計次
- 十二月二日 敦煌莫高窟二〇窟と「大構圖變相圖」の出現  
西林 孝浩

漢簡語彙の研究  
班長 冨谷 至  
本研究班は、居延や敦煌など、當時の邊境より出土した漢簡から語彙を抽出して、その意味を定義し、最終的には漢簡語彙辭典を作成することを目標とする。

難解で、意味不明な語彙がときおり見られた二年律令とは異なり、ある語彙に對してみなが漠然と有するイメージを、どのように明確に言語化するかが作業の中心となっており、二年律令の譯注作成の時とは、また違った楽しみがある。

現在は居延漢簡釋文合校をテキストとし、居延新簡などを援用しつつ、作業をすすめている。近年、額濟納漢簡が公表され、また膨大な分量の懸泉置漢簡もひかえており、語彙のバリエーションは豊かになっていくであろう。

傳統中國の生活空間  
班長 田中 淡  
中國の傳統的な生活空間および造形、すなわち具體的には住まい、宮殿、庭園、あるいは家具配置、室内空間、日常生活と儀禮等々の諸相をとおりして、その特質を探る。時代・地方を限定せず、また建築空間に限らず、廣義的な意味で日常あるいは儀禮の生活空間を對象として、中國學の關連分野および東アジア、周邊地域の専門家の参加を得て、多様な研究主題をとりあげてゆく。研究発表と併行して班員共通の會讀テキストとして、明・方以智『通雅』宮室をとりあげる。標記の期間に行われた研究発表・會讀等は左記の通り。  
四月二六日 中國共產黨政權下における水上居民の生活の變容——珠江デ

五月一〇日 ルタを中心に――長沼さやか  
曲水の宴再考―王羲之が蘭亭  
で曲水の宴を催すまで―

五月二四日 大平 桂一  
七・八世紀における日本およ  
び東アジアの木造高塔

六月一四日 箱崎 和久  
關野貞の中國建築史學  
田中 淡

六月一四日 建築史から見た大村西崖の東  
洋美術史研究 福田 美穂

六月二八日 日本宮殿・邸宅の空間と室  
禮 川本 重雄

九月 六日 中國を中心とする東アジア造  
園史の研究―古代東アジアの  
園林(七世紀まで) 外村 中

九月 六日 初期中國佛教寺院配置的形成  
黃 蘭翔

九月二七日 朝鮮時代の庭園「瀟灑園」を  
めぐって 西垣安比古

一〇月二一日 日中における「都城」概念の再  
検討―藤原京を中心として 豊田 裕章

一〇月二五日 『通雅』卷三八 宮室 商中、  
商内 高井たかね  
十一月二日 『通雅』卷三八 宮室 乞活臺  
高井たかね  
十二月三日 見學會 竹中大工道具館

三教交渉の研究(II)

班長 麥谷 邦夫

本研究班は、「三教交渉の研究」研究班の後を  
承け、引き続き中國中世における儒佛道三教間の  
かかはりをさまざまな角度から研究することを  
目的に、二〇〇五年度から五年間の豫定で組織さ  
れた。初年度は、「三教交渉の研究」班において讀  
み切れなかった『茅山志』の卷二五以降の會讀を  
繼續して行ひ、卷二七までを讀了したところであ  
る。

北朝石刻資料の研究

班長 井波 陵一

本研究班では人文研所藏の北朝石刻資料(一部  
南朝を含む)のうち、比較的まとまった分量の文  
章をもつものを対象として取り上げる。進め方は  
魏晉石刻資料の場合と同じく、まず實際に拓本を  
擴げて文字の對校を行い、次いで語注を施す。そ  
の際、各種の文獻や他機關所藏拓本の寫眞を極力  
參考にすることは言うまでもない。本年は以下の  
資料を扱った(カッコ内は擔當者)。

前秦鄭能修鄧太尉祠碑、秦廣武將軍□產碑(以  
上、井波陵一)、晉故巴郡察孝騎都尉楊府君之  
碑、爨寶子碑、太武皇帝東巡之碑(以上、藤井律  
之)、北魏中嶽嵩靈廟之碑(岡田和一郎)、爨龍顏  
碑(藤井律之)。

眞諦三藏とその時代

班長 船山 徹

本研究班は、六世紀の眞諦三藏を鍵として、彼  
の地理的動きや佛教僧としての位置づけ、その時  
代背景、多様な宗教事情等について考察する。四  
大翻譯家のひとりに数えられる眞諦は、正量部と  
いう部派と密接な関係がある一方で、教理學的に

は説一切有部の俱舍論を重視し、大乘佛教徒とし  
ては唯識思想を宣揚するという複合的な立場に  
立つ。研究班では特に翻譯作成時に作成された眞  
諦自身の注釋(疏)に注目し、その佚文を回収し  
讀解することを通じて、インド佛教と中國佛教の  
雙方から眞諦の活動に對する新たな理解を試み  
る。

二〇〇五年度から五年間の豫定で組織され  
たうち、初年度である今年は、四月から二月の間  
に、以下のそれぞれについて、順次、擔當者の譯  
注原稿をもとに検討を行なった。眞諦傳(船山  
徹)、攝大乘論序(麥谷邦夫)、俱舍論序・大乘唯  
識論序(古松崇志)、歷代三寶紀眞諦傳・金剛般  
若經序(大原嘉豐)、仁王般若經疏序品(大竹哲)  
、同觀空品(長谷川嶽志)、同教化品(那須長彦)、  
同二諦品(吉村誠)。

中國古鏡の研究

班長 岡村 秀典

漢代の銅鏡は、圖像文様の變化がいちじるし  
く、考古資料の年代をはかる指標として東アジア  
各地で重視されてきた。また、その圖像と銘文  
は、漢人の精神世界をものごたる資料としても注  
意されてきた。そのような視角に留意しながら、  
本年はとくに文學史における銘文の意義に着目  
し、音韻論からそれを論じたB. Karlgren,  
EARLY CHINESE MIRROR INSCRIPTIONS,  
(BMFEA, No. 6, 1934)を會讀した。平行して實  
施した研究發表は以下のとおり。

四月二六日 今、なぜ「カールグレン」なの  
か 下垣 仁志

五月一七日 所謂、卑彌呼の鏡とされる「陳

是紀年鏡」銘文の釋讀

光武 英樹

五月三二日 倭製鏡の製作・流通論理

下垣 仁志

六月二日 蟻螭紋鏡の研究(一)

廣川 守

七月 五日 漢代の器物生産と文字

向井 佑介

九月二七日 漢代の鏡銘と文學作品

金 文京

一〇月一一日 獸帶鏡の研究 岸本泰緒子

一二月 六日 畫文帶神獸鏡に關する一考察 彦坂めぐみ

一二月一三日 山東省「鏡の中の宇宙」展の紹介 岡村 秀典

人文學研究部

日佛文化交渉の研究

班長 宇佐美 齊

二〇〇二年四月から四年間の豫定で實施されている共同研究である。日本人にとってのフランス文化、フランス人にとっての日本文化、このふたつを問うことから始めて、具體的なヒトとモノの交流を重視しながら考察をすすめている。そのうえで日佛兩文化の相互的な交渉がもたらした豊かな創造性とその問題點とを浮き彫りにするのが主なねらいである。時代區分としては、フランスでいえば第二帝政と第三共和制の時代、日本でいえば幕末維新期から昭和一〇年代あたりま

でを想定している。フランスの文學や諸藝術を對象とする研究者のみならず、日歐比較美術史、日本文化史、比較文明史などを専門とする研究者にも加わっていただいている。また正規の班員としてではないが、必要に応じて海外からも複数の研究者の協力を得ている。二〇〇五年四月からは、

成果報告書の執筆と編集作業を重ねており、近く京都大學學術出版會から『日佛近代の交感—文學・美術・音樂—』と題して刊行の豫定である。 一月二四日 高島北海とフランス 鶴飼 敦子

ドイツ音樂からの脱出?—戦前日本におけるフランス音樂受容の幾つかのモード— 岡田 曉生

二月一四日 蜻蛉集における和歌の佛譯をめぐって 吉川 順子

フランス人エマニユール・トロンコワと明治末期の洋畫 (ゲスト) クリストフ・マルケ

二月二八日 日本におけるフランス印象派音樂の受容について 佐野 仁美

憧れはフランス、花のパリ 袴田麻祐子

三月一四日 『告白』の翻譯と日本近代の自傳文學—藤村の場合— 小西 嘉幸

四月一八日 原稿檢討會 全員

五月 九日 原稿檢討會 全員

六月三三日 原稿檢討會 全員

六月 六日 原稿檢討會 全員

六月三〇日 原稿檢討會 全員

七月 一日 原稿檢討會 全員

九月 二日 原稿檢討會 全員

一〇月一七日 編集打ち合わせ 宇佐美・大浦

一二月一四日 編集打ち合わせ 宇佐美・高階

二月 二日 編集打ち合わせ 宇佐美・岡田

フェティシズム研究の射程 班長 田中 雅一

本共同研究班は、通算第五六回をもって終了することになった。この研究會の成果は近日中に複数巻出版豫定である。フェティシズム研究はまだ十分に議論を盡くしたとは言えないが、モノと人間との關係を様々な角度から論じる場を提供することができたと思う。

三月 二日 歴史を具體化するということについて 三枝憲太郎

(國立民族學博物館・外來研究員) 山と神を盜られたクラヴァ 内山田 康

國家形成の比較研究 (筑波大學・教授) 班長 前川 和也

個別報告、討論はすでに終了しており、研究報告書出版のための諸作業が行われた。なお報告書『國家形成の比較研究』(前川和也・岡村秀典編)は、計一八の論考を得て二〇〇五年五月に學生社より刊行された。



身體の近代

班長 菊地 曉

「身體」を手がかりに異分野間コミュニケーションを少しでも風通しの良いものにする事として、そのことを通じて制度疲労の蓄積が指摘されて久しい「共同研究」なる營爲のあり方を再想像すること、それが本研究のねらいである。

本年度は、昨年度の成果に基づき「身體論のすめ」「丸善」を刊行した。また、昨年度と同様、全學共通教育課目のリレー講義を開催、班員およびゲストスピーカーの協力を得て身體をめぐる概念や方法の對象化をさらに多角的に試みた。

四月 七日 大阪歴史博物館「阪神タイガース展」見學

四月 一四日 技能と身體——僕は、昔、皿洗  
いだった—— 菊地 曉

四月 二二日 均質化を強要される身體——僕は、昔、天才ピアニ少年だった？—— 岡田 暁生

四月 二八日 怠ける身體——僕は、昔、體育會系だった—— 藤原 辰史

五月 二二日 ナショナルリズムと身體 (ゲスト) 中島 嶽志

五月 二九日 怠惰な身體・弱い身體——僕は、今日も怠惰だった—— (ゲスト) 近藤 秀樹

五月 二六日 生命科學の身體觀 (生命觀) 加藤 和人  
六月 二日 共北二二六教室 だんす (ゲスト) 花沙

六月 九日 社會の決定論を抜け出す技法——武術を素材として——

六月 一六日 變身の物語り 倉島 哲

六月 二三日 中國の坐具と坐法——床坐と椅子坐—— 佐野 誠子

六月 二四日 舌で讀む聖書——ハンセン病回復者/キリスト者—— 高井たかね

ビデオレター 金地慶四郎 郎講演會

人間回復の架け橋——ハンセン病の歴史に學ぶ 牧野 正直 (邑久光明園長)

ドキュメンタリー「どっこい生きてるで」 西村 聰 (テレビ大阪プロデューサー)

六月 三〇日 頭でっかちと身體でっかち(或いは、これがホントの電波系) (ゲスト) 片山 杜秀

合評會・菊地曉編「身體論のすめ」 (ゲスト) 阪田眞己子

一〇月 六日 寄せて上げる冒険——あるいは身體のポリテクス—— 片山 杜秀

一〇月 二三日 美術と身體——日本で裸體を描く—— 高階繪里加

一〇月 二〇日 人はいかにして(客)になるのか——浪花節史にみる演者・客の關係性——

一〇月 二七日 吉本新喜劇にみる合意的身體のすめ——面白から笑うのではない、笑うべきところだから笑うのである—— (ゲスト) 眞鍋 昌賢

一一月 一〇日 身體の夢、夢の身體——ドニ・デイドロ『グランベールの夢』をめぐって—— 王寺 賢太

一一月 二七日 戦時下「皇民化」政策と朝鮮人の身體 李 昇燁

一一月 一日 身體なきロボット (ゲスト) 鹽瀬 隆之

一一月 八日 透明ランナー、現る？——子どもたちの記憶から身體を考える、その歴史記述に向けて—— 谷川 穰

一一月 二五日 「對面的」をめぐって 大浦 康介

一二月 二三日 マンガ讀者の身體 (ゲスト) 表 智之

領事館警察の研究 班長 水野 直樹

近代日本が朝鮮・中國との間に結んだ條約に

規定された治外法權は、朝鮮と中國（東北地方、滿洲を含む）に日本の領事館警察なるものを生み出した。朝鮮では一九〇五年の保護條約まで、中國東北地方では滿洲國における日本の治外法權が撤廢されるまで、中國では汪兆銘政權期に治外法權が撤廢されるまで、各地の日本領事館に外務省から警察官が派遣され、様々な活動を行なった。在留日本人（後には臺灣籍民・朝鮮人を含む）の保護・取り締まり、情報活動、相手國・歐米外交機關との折衝などである。

本研究は、近代日本と東アジアとの關係を考へる上で重要な領事館警察の機構や活動、領事館警察が把握・認識した中國・臺灣・朝鮮の民族運動、共產主義運動、労働運動などの動向等々を、日本史・朝鮮史・臺灣史・中國史の研究者による共同研究を通じて解明しようとするものである。また、中國・朝鮮側史料、歐米（特に英佛）諸國の史料などを利用して、中國・朝鮮政府の對應、中國人・朝鮮人の認識、歐米諸國の對應などについても検討を加えたいと考えている。

- 一月一九日 ワシントン條約體制下の青島における領事館警察について
- 一九二二年膠州灣租借地返還交渉を中心に——長澤 一恵
- 二月一六日 上海領事館警察と工部局警察 副島 昭一
- 廈門領事館警察分所設置問題について 村上 衛
- 三月 二日 戦時上海と上海領事館警察に

ついで（ゲスト）孫 宏石  
 外務省警察による在留邦人取り締り 桂川 光正  
 三月一六日 初期領事官警察における風俗警察——日露戦争期までの朝鮮を中心に—— 藤永 壯  
 共同研究のまとめについて

文明と言語 班長 横山 俊夫  
 人間社會が安定し、しかもそれが文をなし明らかなる状態に赴くとき、言語が變容しつつはたす役割は大きい。その諸相を、さまざまな事例研究を通して明らかにするとともに、現代の知の専門細分化による言語の流通力の衰えが社會にもたらしている閉塞状況に對して、その解決のための道を、班員の協同により模索、提言することをめざしている。

第四年度は、班員各自の専門分野からの報告を行ったほか、夏以降はこれまで論讀をつづけてきた『難波鉦』の現代の共通語および上方語への翻譯作業を集中的に行つた。成果は、共同研究拾遺として平成一七年度末に『難波鉦——梅之部抄』と題し公刊する。一七世紀大坂の、或る種の閉鎖空間において言語が紡ぎ出していた人間關係の綾が照らし出されるだろう。なお、班員の一部は、當研究班の成果を「京都文化會議二〇〇五」や「はんなり京都嶋臺塾」といった公開の催しに參畫するかたちで活かした。

一月一五日 西鶴の言語力 廣瀬千紗子  
 『難波鉦』初冠 その三

一月二三日 北京の今關天彭氏 深澤 一幸  
 『難波鉦』初冠 その四 倉島 哲  
 二月 五日 『語りえぬもの』を語るシステム論の功罪 廣瀬 隆之  
 （ゲスト）鹽田 浩平

二月一九日 『難波鉦』飛鳥川 廣瀬千紗子  
 民家をつくる環境と文化 Susan B. Hanley  
 『難波鉦』初冠 その五 倉島 哲  
 二月二六日 からくり人形「峯工房」見學 倉島 哲  
 （ゲスト）峰崎 十五  
 三月 五日 感染を語ることは 田中祐理子  
 『難波鉦』雪中驚 廣瀬千紗子  
 五月 七日 人體と言語  
 （ゲスト）鹽田 浩平

五月二一日 人形淨瑠璃の大道具 後藤 静夫  
 『難波鉦』儒醫 岡田 曉生  
 六月一一日 東アジアの異類論争文學とその背景 金 文京  
 『難波鉦』數目金 武田 時昌  
 所有と分配の起源 山極 壽一  
 六月一八日 『難波鉦』出家 森本 淳生  
 七月二八日 『第二回 鉦叩會』——『難波鉦』現代語譯稿作成—— 後藤、廣瀬、倉島、横山他

九月二日 「第三回 鉦叩會」―「難波鉦」

現代語譯稿作成―

森本、金、深澤他

九月二四日 「難波鉦」「熊谷笠」定稿

田中祐理子

「難波鉦」「道芝」定稿

倉島 哲

一〇月二五日 「難波鉦」「道芝」定稿

倉島 哲

「難波鉦」「亂碁・飛鳥川・雪中驚」定稿

廣瀬千紗子

一二月五日 「難波鉦」「藤袴」定稿

遠藤 彰

「難波鉦」「身代」定稿

金 文京(代讀)

一二月九日 「難波鉦」「十五夜」定稿

後藤 靜夫

「難波鉦」「身代」定稿(續)

金 文京(代讀)

一二月二七日 「難波鉦」「手鏡」定稿

荒牧 典後

「難波鉦」―「梅之部抄」製本打合せ

全員

一二月二四日 「難波鉦」「朧月」定稿

加藤 和人

「難波鉦」―「梅之部抄」製本打合せ(續)

全員

人種の表象と表現をめぐる學際的研究

班長 竹澤 泰子

二〇〇三年四月から始まった本研究會は、その二年前から進めてきた科學研究費基盤B(一)「人種概念と實在性をめぐる學際的基礎研究」(代表 竹澤泰子)によるとくに人種概念をめぐる共同研究を土臺としている。しかし人種が社會的構築物であることが露呈されても、なぜ人種が、社會諸制度から醫療、教育、嗜好・美意識にいたるまで、リアリティをもつかは、概念とあわせて考えなければならぬ問題である。そこで本研究會では、表象と表現をキーワードに、文化人類學、歴史學、文學、美學、自然人類學、生命科學などの多領域にまたがる班員から構成し、學際的な研究を進めている。表象のみならず表現を含めるのは、主體としての當事者の能動的側面を看過しないためである。なお二〇〇五年は班長が三月末から長期海外研修となったため、五月の一時歸國時に開催したものも含めて、七回のみ開催となった。

一月 七日 ヒトゲノム・遺傳子研究に

とつての人種・民族問題―最近の話題から 加藤 和人

ベネズエラ、チャベス政権下の民族運動と人種主義

石橋 純

一月 八日 ブロカからデュルケムへ

(ゲスト) 竹澤尚一郎(民博) コメンテーター 渡邊 公三

黒人アスリート表象と對抗戰略の可能性―J・ホバーマンの歴史學的アプローチを事例に―

川島 浩平

三月 四日 サラ・フォーブス・ボネッタは何を「語った」のか?―大英帝國のなかの人種再考―

井野 瀬

雑誌記事から見る外人男性とのつきあい方 國際結婚との關係を探る 田中 雅一

三月 五日 ヒトゲノム・遺傳子研究にとつての人種・民族問題―最近の話題から 加藤 和人

(國際交流基金と共催)

三月二五日

一 Predicament of Place: Why Distinctions between Asian and Asian Americans Matter Young Soon Min (カリフォルニア大学 Irvine 校)

二 Certain Latitudes: Diasporic Perspectives Is Yellow White or Black: Locating Asian Americans Paul Y. Watanabe (マサチューセッツ大学ボストン校)

五月二七日 加治屋健司「大浦信行の《遠近

を抱えて》はいかにして九〇年代の言説を準備したか」の紹介と研究動向 北原 恵  
 多民族國家「滿洲國」をめぐる民族言説と國民國家言説―日本人による人種表象を中心として― 蘭 信三

五月二八日 辭(事) 典類にみる(人種)の定義變遷と若干の考察

スチュアート 山田詠美について思うことなど 大浦 康介

一九六〇年代の研究

一九六〇年代は、われわれの生活と意識がそれまでのものから大きく變化した時代であった。しかもその變化は世界的な規模で生じたこと、また生活のさまざまな領域において認められること、さらに日本についていうなら、明治維新や第二次世界大戦後の變化を上回るものであるかもしれないことさえ豫想される、そのような變化である。自身がそのいくぶんかを生きた時代、また現在からほど遠くない時代について何ごとかを語り、結論を抜き出すのはけっして容易なことではない。だが一九六〇年代をつうじての世界の變貌が、今われわれのいる世界に直接につながっているかぎりにおいて、その腑分けを行うことはわれわれ自身を知るうえでせひとも必要な作業でもある。この共同研究は、以上のような認識に立つて、政治史や經濟史もさることながら、日常生活

から學術や藝術にまでいたる多様な側面での世界の變化に注目して、また一九四〇年代生まれの、いわば六〇年代を生きた世代から、七〇年代生まれの、つまりこの時代については語られた記憶しかもたない世代までが集まって進めることに努めたものであり、二〇〇五年三月に終了した。現在報告論集刊行のための作業を進めている。

一月二二日 研究報告書作成に向けて 全員

二月 四日 ドラッグ・カルチャー六〇―クロルプロマジンからLSD 北垣 徹

二月一八日 宇野弘藏再論―價と純粹② 大黒 弘慈

三月一日 悪魔が語り手になる頃―六〇年代の文學と宗教の一側面 (ゲスト)

三月一八日 一九六〇年代、古典的ハリウッド映畫期からポスト古典期への移行期―ヒッチコック映畫とヌーヴェル・ヴァーグに見られる視覚的媒體における外見と内實の乖離 加藤 幹郎

アジアネットワークの研究 班長 籠谷 直人

本共同研究は、歴史的地域秩序分析をめざす。二年目の研究班。アジア地域秩序を規定した帝國・帝國主義・覇權の時代に即して、商人のネットワーク機能の變遷を考察する。メンバーは、一

七世紀から二〇世紀を對象とした歴史家で構成される。中國史、インド史、東南アジア史、日本史、アメリカ史の専門家が一同に會する共同研究を組織した。境界線に圍まれた主權國家間のシステムとは異なる、經濟的な發展徑路の存在を歴史的なアジアに探りたい。主權國家の境界線によってその伸張が制約されながらも、帝國の下で育まれたアジア商人のネットワークが、今日も市場秩序を提供しているとの視點にもとづいて、アジア・ネットワークを検討・考察し、主權國家間システムの相對化をめざす。

班員 岩井茂樹 水野直樹 村上衛(以上所内) 小野澤透(文學研究科) 井口治夫(名古屋大・環境學研究科) 上田貴子(日本學術振興會特別研究員) 大石高志(神戸市立外國語大・國際關係) 岡本隆司(京都府立大・文) 加藤雄三(總合地球環境學研究所) 陳天璽(國立民俗學博物館) 陳來幸(兵庫縣立大・經) 福岡正章(同志社大・經) 水野祥子(大阪大・文) 宮田敏之(天理大・國際文化) 戴下信幸(近畿大・經營)

脇村孝平(大阪市立大・經)

一月二二日 華商ネットワークとアイデンティティーそのイメージと實體― 陳 天璽

二月 四日 戦後アジア國際政治の中の日本―海城東南アジアへの關與を中心に― 宮城 大藏

(國立民族學博物館)

四月一五日 「帝國とネットワーク」研究の方向性について…研究協働を  
通した展望 籠谷 直人

五月一三日 印僑商人論の研究動向  
大石 高志  
(神戸市外国語大學)

五月二七日 一八世紀末～一九世紀前半の  
ベンガルにおける鹽市場の形  
成と變容―ベンガル「植民地  
化」に關する一考察  
神田 さやこ  
(慶應義塾大學)

六月一〇日 一八世紀後半のベンガルにお  
けるイギリス東インド會社の  
貨幣政策 谷口 謙次  
(大阪市大大學院經濟學研究  
科・D三)

六月二二日 植民地の環境保護主義―英領  
インドにおける乾燥化理論の  
展開 水野 祥子  
(大阪大學)

二〇〇五年度大阪歴史科學協  
議會・大會報告  
(關西大學・千里山キャンパス  
第一學舎(法・文學部)第三會  
議室)

一九世紀の東アジアにおける  
主權國家形成と帝國主義  
籠谷 直人

一九世紀のアジアにおける銀  
流通 西村 雄志  
(松山大學)

六月二四日 帝國と介入―フレデリック・  
リースロスの國際金融政策  
石田 憲  
(千葉大學)

七月 三日 國際ワークショップ: "The  
United States and Globaliza-  
tion: Power, Empire, and  
Business Networks"  
籠谷直人 Thomas W. Zeiler,  
(Department of History, The  
University of Colorado) 小野  
澤透(京都大學) 井口治夫(名  
古屋大學) Marc Galichio  
(Department of History, Vi-  
lanova University)

七月二九日 共同ワークショップ(遠  
藤乾グループ+籠谷グループ)  
(北海道大學法學部)

七月二九日 課題: グローバル・ガバナ  
ンスの思想  
世界社會論―高田保馬を手が  
かりに― ベン・ミドルトン  
(フェリス女子大學)

A. ソルターの機能主義  
城山 英明  
(東京大學)

七月三〇日 補完性の思想―グローバル・  
ガバナンスの秩序原理?  
遠藤 乾  
(北海道大學)

世界政治における宗教  
池内 惠  
(國立民族博物館)

七月三〇日 課題: 戦後東アジアの帝國秩  
序  
東アジアにおける帝國と帝國  
主義 籠谷 直人  
戦前戦後の連續と斷絶―東ア  
ジア帝國秩序再論 松浦 正孝  
(北海道大學)

インド海域と東アジア地域秩  
序 大石 高志  
(神戸市立外國語大學)

上海・金融・銀本位制  
城山 智子  
(一橋大學)

バックスアメリカカーナと戦後  
アジア通貨秩序 田所 昌幸  
(慶應義塾大學)

戦後日本外交と東南アジア國  
際秩序 宮城 大藏  
(北海道大學)

シンポジウム: 帝國とネット  
ワーク―アジア史における  
「長期の一九世紀」

八月二六日

会場：大阪市立大學文化交流センター（大阪驛前第二ビル六階）

近代日本からみた帝國とネットワーク（問題提起一）

アジア史における『長期の一九世紀』（問題提起二）

脇村 孝平  
（大阪市立大學）

一九世紀前半のアジア交易圏

杉原 薫  
（大阪大學）

イースタンバンク問題とイギリス帝國主義（一八五三年—一八六七年）—英領インドと海峽植民地

川村 朋貴  
（富山大學）

一九世紀末、ビン南商人の轉換

村上 衛  
（横濱國立大學）

モーリシャスのコメ貿易・流通とインド系ムスリム商人

大石 高志  
（神戸市外國語大學）

コメント：岩井 茂樹（京都大學）

九月一六日

舊帝國研究の動向についてのメモ  
籠谷 直人

一〇月七八日

國際ワークショップ：Networks and Empires: Indian Migrants/Merchants in East Asia and Beyond

籠谷直人 大石高志（神戸市立外國語大學） 脇村孝平（大阪市立大學） Lee Pu-tak 李培德（香港大學） Lin Man-hong 林紅滿（中央研究院 臺灣）

Choi Chi-cheung 蔡志祥（香港科學技術大學） Sit-tong Kwok 郭少棠（香港大學）

村上衛（横濱國立大學） Wu Xiao an 吳小安（北京大學）

Rajeswari A.Brown (SOAS, London University, UK) 神田さやこ（慶應義塾大學）

Claude Markovits (SOAS, London University, UK) Liu Hong 劉宏（National University of Singapore） 陳來幸（兵庫縣立大學） 松浦正孝（北海道大學）

Zhong Shunlin 鍾淑敏（中央研究院 臺灣） 城山智子（一橋大學） Wong Siu-tun 黃紹倫（香港大學）

アジア太平洋戦争研究ワークショップ

一〇月 九日  
汎アジア主義における『インドショップ』

要因

松浦 正孝  
（北海道大學）

日中紛争の『世界化』—中國の日中紛争解決構想と米英ソ参戦問題—  
鹿 錫俊  
（島根縣立大學）

帝國と介入—フレデリック・リース・ロスの國際金融政策  
石田 憲  
（千葉大學）

一〇月二四日  
パラダイムの帝國—アメリカ MBA プログラム 篠原 初枝  
（早稲田大學）

一月二一日  
越境する社會空間—日本における中國系移住者の移動と定着をめぐる— 田嶋 淳子  
（法政大學）

一月一九日  
ワークショップ—日本におけるマイノリティ・ビジネスの歴史的展開  
オーガナイザー：籠谷直人（京都大學） 韓載香（東京大學） 曳野孝（京都大學）

マイノリティ・ビジネスの歴史的展開—國際比較に向けて  
曳野 孝  
（京都大學）

在日韓國・朝鮮人ビジネスの歴史的動態  
韓 載香

（京都大學）

(東京大學)  
神戸における在日韓国・朝鮮  
人産業の發展 高 龍秀  
(甲南大學)  
華僑とネットワーク  
籠谷 直人

在日華僑華人ビジネスの歴史  
的動態 陳 來幸  
(兵庫縣立大學)

二月九—二一日 國際ワークショップ：疫  
病・環境・グローバルイゼー  
ション  
飯島涉(青山學院大學) 脇村  
孝平(大阪市立大學) Mark  
Harrison (Wellcome Unit for  
the History of Medicine,  
Oxford, UK) Park Yunjae  
(Yonsei University, Korea)  
Robert Perrins (Acadia Uni-  
versity, Canada) 上田信(立  
教大學) Shi-yung Liu (Aca-  
demia Sinica, Taiwan) V. R.  
Muraleedharan (Indian Insti-  
tute of Technology Madras,  
India) Yawen Ku (Postdoc-  
toral Fellow [2006-]) Re-  
search Center for Humanities  
and Social Sciences, Aca-  
demia Sinica, Taiwan) Ki Che

Leung (Academia Sinica,  
Taiwan) 遠藤乾(北海道大  
學) David Arnold (SOAS,  
University of London, UK)  
Kalanga Tudor Silva (Uni-  
versity of Peradeniya, Sri  
Lanka) 城山英明(東京大學)  
後藤春美(千葉大學)

空間の再審—人文・社會科學の新基軸を求めて—

班長 山室 信一

空間とは、時間とともに人間が自己と他者につ  
いて認知していくための不可欠な枠組みであり、  
人間とその社會のありかたを追求すべき人文・  
社會科學においては、明確な概念規定に基づく體  
系化が要請されている。しかしながら、歐米近代  
の人文・社會諸科學においては、時間こそが基軸  
となっており、空間そのものを対象として捉える  
ことに必ずしも成果を擧げてきたわけではない。  
しかも、グローバルイゼーションの進行の中で空間  
の把握は時間や速度にまよって置き換えられつつ  
ある。しかし、グローバル化によって生活様式の  
平準化が進めば進むほど、機構や生態などの地理  
的條件、都市や建築などの空間形式の差異のあり  
かたこそが、人間觀・社會觀そして世界認識のあ  
りかたをますます規定していく可能性もまた否  
定できない。  
この共同研究では、自然環境と人間活動の關係  
や、生活空間としての都市・建築などの形成のさ  
れかた、そしてさらにそれが世界認識としていか

に把握されてきたか、といった學知と實踐知その  
ものを再審に付し、そこから新たな人文・社會科  
學の基軸を析出していくことをめざしている。  
本年度は、昨年度に引き續き基本的文獻の會讀  
を進めるとともに、モンゴルでのフィールドワー  
クを実施することによって、學知と實踐知との關  
係について探求した。

- 一月一七日 近世から近代にかけての秩序  
認識のありかた 坂本優一郎
- 二月 七日 論文會讀① 全員
- 三月 七日 論文會讀② 全員
- 三月一三日 擴大研究會
- 四月 四日 書評『空間のイギリス史』  
藤原 辰史
- 四月一八日 書評『ナチス・ドイツの有機農  
業』 菊地 暁
- 五月一六日 會讀 和辻『風土』谷川 穂  
六月 六日 會讀 セルトン『日常的實踐の  
ポイエティック』中島 嶽志
- 六月二〇日 『身體論のすすめ』のかたわら  
で空間論を素描する 菊地 暁
- 七月 四日 會讀 柳田『都市と空間』  
藤原 辰史
- 八月 フィールドワーク(モンゴル)
- 九月一五日 解題文獻檢討會 全員
- 一〇月一七日 會讀 戸坂『空間について』 全員
- 十一月 七日 會讀 ルフェーブル『空間の生

産」第一章 坂本優一郎

一月二日 會讀 ルフェーブル『空間の生

産』第二章 坂本優一郎

二月 五日 會讀 ルフェーブル『空間の生

産』第三章 藤原 辰史

フェティシズムの社會・文化的文脈 班長 田中 雅一

フェティシズム研究の射程を受ける形で「フェ

ティシズムの文化・社會的文脈」を發足した。こ  
れはモノに注目して行われたこれまでの研究會  
の反省にたつて、その背景となる文化および社會  
のありかたに注目する研究會である。

六月 六日 打ち合わせ

六月二〇日 覗き見の視覚文化・初期映畫

における露出症的構造の一考 森村 麻紀

七月二五日 フェティシズムと「在る」こ

と・インドネシア・フローレ

ス島における親密性とその變

容 青木恵理子

(龍谷大學・教授)

一〇月一七日 人體模倣を越えて…日本にお

けるタッチワイフの變遷を中

心に 西村 大志

(廣島國際大學人間環境學部・

講師)

十一月 七日 Snipers of The Israel Defense

Forces in the Al-Aqsa Intif-

ada: Killing, Weapons and

Soldiers' Bodies Eyal Ben-Ari

(京都大學人文科學研究所・客

員教授)

一月二日 映畫館と觀客 加藤 幹郎

(京都大學人間環境學研究科・

助教授)

虚構と擬制—總合的フィクション研究の試み

班長 大浦 康介

本研究は、從來文學、哲學、論理學、法學など

の分野で行われてきたフィクションの研究を相

互に關係づけるとともに、美術や音楽、歴史學、

人類學、自然科学などの諸學問における同種の概

念の有効性を検討し、あわせて總合フィクション

學 (General Fictionology) とでも呼ぶべきディシ

プリンの構築をめざすものである。文學における

虚構(小説、演劇)、映畫やテレビドラマ、種々の

ゲームや子供の「ごっこ」遊び、様相論理學があ

つかう可能世界、民法などという擬制、歴史記述

の「うそ」、宗教儀禮の假構性、自然科学の眞理探

求における作業假説やメタファー—それらの共

えるかを明らかにしたい。

まずは問題意識を共有するため、当面は基本文

獻の把握に努めたいと考えている。初年度の今年

は、自由發表やゲスト講演も交えつつ、前期にお

もに言語哲學や文學理論の分野でのフィクショ

ン論の最新成果を示す文獻の、また後期はその

ルーツともいふべき古典的文獻の紹介・讀解を

行なつた。

四月一八日 研究會趣旨説明と John R

Seale のフィクション理論の

紹介 大浦 康介

五月 九日 バヴェルの『虚構世界』を讀

む: 「隔離主義」 Segregation-

ism 批判をめぐって 河田 學

五月二三日 Marie-Laure Ryan, Possible

Worlds, Artificial Intelli-

gence, and Narrative Theory

を讀む 岩松 正洋

六月一三日 フィクションとしての「少女」

園田 浩一

六月二七日 中田秀夫監督『女優靈』を觀る

石田 美紀

七月一日 古代ギリシアにおける「過去」

の創出 庄司 大亮

一〇月二日 Photographic: fiction narra-

tion (寫眞: 虚構・物語) Xavier Martel

十一月二日 (ゲスト) 奥泉 光



一月二日 ヒューム「人性論」を讀む

王寺 賢太

二月五日 Hans Vaihinger, Die Philosophie des Als Ob を讀む

岡田 暁生

二月十九日 抗争するフィクション? 四月一日の「神話」をめぐって

小關 隆

啓蒙の運命—系譜學の試み 班長 富永 茂樹

「啓蒙」は、一八世紀ヨーロッパの思想的な潮流を指示するのみならず、普遍的な價值を持った理念の擔い手として、およそフランス革命以後の世界各國において追求され、あるいはしばしば批判を受けてきた概念でもあった。この後者の観点からすれば、「啓蒙」は、近代の社會が、その都度の自己の組織化・再組織化に際して「近代」自身を反省する際の鍵概念であったと言える。「啓蒙」の批判と再考が、「ポストモダン」とも言われる今日、ヨーロッパ中心主義や近代の諸制度・諸學問分野に對する度重なる批判と、國民國家分立の世界システム・代議制民主主義、あるいは「市民社會」・「文化」・「教養」など、近代社會の理念と制度の動搖・衰退をうけて、再び思想史研究・人文學研究の重要な課題として浮上していることは、ハーバーマス、フーコー、デリダといった現代の哲學者たちによる「啓蒙」再考の試みによっても明らかであろう。

本研究では、「啓蒙」を、一八世紀ヨーロッパの思想潮流を指示する時代概念と、近代社會の組織

化・再組織化に際しての鍵概念とする二重の射程を持ったものとして位置づけた上で、西歐諸國のみならず、アジア・アメリカ・ロシアなどを含めた世界的な展望のもとに、思想史・社會學・文學・藝術學・科學史などの多分野の研究者を募り、およそフランス革命以後の世界における「啓蒙」の理念と實踐の諸様態についての系譜學的かつ比較史的な研究を行う。一九世紀以降の世界における「啓蒙」の理念と實踐の諸様態について、包括的で・統一的なヴィジョンをもった歴史敘述を提出すること、また、近代史において「啓蒙」が果たしてきた肯定的・否定的機能の偏差と恒常性を明らかにし、現在、われわれがなお「啓蒙」から受け継いでいるものは何か、あるいはまた「啓蒙」の何を・どのように受け継ぐことができるかを提起することが本研究の目的である。

四月二日 共同研究を始めるにあたって

富永 茂樹

五月二三日 カッシーラー『啓蒙の哲學』とその周邊

王寺 賢太

五月二〇日 アザール『ヨーロッパ精神の危機』を讀む

森本 淳生

六月三日 アザール『十八世紀ヨーロッパ思想』を讀む

伊藤 玄吾

六月一七日 コゼレック『批判と危機』を讀む

藤原 辰史

七月一日 ヴェントゥーリ『啓蒙のユートピアと改革』を讀む

坂本優一郎

七月十五日 スタロバンスキー『自由の創出』・『理性の標章』を讀む

田中祐理子

九月二六日 エリアス『文明化の過程』・『宮廷社會』を讀む

葛山 泰央

九月三〇日 ボーロック『The Machiavellian Moment』を讀む

前川 眞行

一〇月七日 ボーロック『Barbarism and Religion』を讀む

ランショウ

一〇月二二日 James Schmidt (ed.)『What is Enlightenment?』 Part I, II を讀む

齊藤 涉

十一月五日 James Schmidt (ed.)『What is Enlightenment?』 Part III を讀む

小田川大典

十一月一日 フュレ『フランス革命を考へる』—革命の終焉をめぐって

北垣 徹

十一月二六日 統治性、主體、政治—フーコー晩年のプロブレマティクをめぐって

市田 良彦

十二月二七日 公共圏の喧噪とへ外への沈黙—ハーバーマス『公共性の構造轉換』と「啓蒙」

佐藤 淳一

王權と儀禮

班長 藤井 正人

本共同研究(二〇〇五年四月—二〇〇九年三月)は、王權と儀禮との關係を古代インドの王權儀禮を中心に研究することを目的としている。

ヴェーダ文獻を基礎資料にしているが、インド學の諸分野のほか、歴史學、考古學、美術史、人類學などの複数の視點から資料を分析することにも、さまざまな時代と地域における王權と儀禮に關わる問題を比較研究の對象としている。隔週に開いている研究会では、會讀と報告會を組み合わせて、初年度は、會讀を一回行なうことに、報告會を一回行なっている。會讀では、ヴェーダ祭式文獻の中から王即位式(ラージャスーヤ)に關する箇所を解讀している。便宜上、新資料であるヴァードウーラ・シユラウタストラを中心に讀み進めているが、すべての關連箇所を整理して、この儀禮に關する文獻資料を集成することを目標にしている。報告會では、メンバーおよびゲストスピーカーが、「王權と儀禮」に關係するテーマで報告している。會讀がある程度進んだ段階で、作成した資料を報告會で提示して、さまざまな角度から分析し検討することも豫定している。

- 五月 六日 第一回研究会(報告會一)  
共同研究「王權と儀禮」事始め  
藤井 正人
- 六月 三日 第二回研究会(報告會二)  
The Nasatyas and Proto-Aryan religion  
Parpola
- 六月 一七日 第三回研究会(會讀一)  
Vadhula-Srautasutra 一〇、  
一、一、一、一七 梶原三惠子
- 七月 一日 第四回研究会(會讀二)

- 七月 二五日 第五回研究会(報告會三)  
The emergence of the large states and of empire in Eastern North India  
Witzel
- 九月 三〇日 第六回研究会(會讀三)  
Vadhula-Srautasutra 一〇、  
一、六、一、一〇、二、二〇(I)
- 一〇月 一四日 第七回研究会(會讀四)  
Vadhula-Srautasutra 一〇、  
一、六、一、一〇、二、二〇(II)  
井狩 彌介
- 一〇月 二八日 第八回研究会(會讀五)  
Vadhula-Srautasutra 一〇、  
二、二、一、一四三 大島 智靖
- 一一月 二八日 第九回研究会(報告會四)  
文化人類學からみたインドの王權—ルイ・デュモン『ホモ・ヒエラルキクス』とそれ以後  
田中 雅一
- 一二月 二日 第一〇回研究会(會讀六)  
Vadhula-Srautasutra 一〇、  
一、一、四、一、一〇、三、七  
横地 優子
- 一二月 二六日 第一一回研究会(會讀七)  
Vadhula-Srautasutra 一〇、  
三、八、一、一八 赤松 明彦

客員部門

近代京都研究

かつての首都としての文化の長い「傳統」と、

近現代の一地方都市という社會・經濟的現實との相克が、近代京都の歴史を織りなしてきた縦糸と横糸と考えれば、「傳統」と現實の互いにずれた都市性格をいかに調整するかが明治以來現在まで京都の實際の政治的課題であった。このずれのなかに、近代京都のさまざまな問題への糸口が潜んでいると思われる。「近代の歴史都市としての京都」についての基本的な諸問題を總合的に論じ、さまざまな分野の具體的な主題を互いに論じながら、近代現代の京都の根本問題を見通す視座を考えてきた。二〇〇六年度には、三年間の共同研究の報告書をまとめる。

- 一月 二日 「國民公園」京都御苑の近代—  
京都における遺産公園としての特性—  
井原 縁
- 二月 一九日 有職故實家・猪熊淺磨  
猪熊 兼勝
- 三月 二六日 エクスカーション 大阪市松  
島・川口舊居留地・飛田新地
- 三月 一九日 宇治川水力發電所工事と朝鮮  
人労働者  
水野 直樹
- 四月 二六日 京都風致行政の戦前戦後—市  
民からみた風致保全制度  
伊從 勉
- 五月 二八日 京都府畫學校と泉涌寺御座所  
田島 達也

『我樂多珍報』の周邊—京都日  
日新聞社を中心に—

福井 純子

六月一八日

地價分布からみた近代京都の  
地域構造

山田 誠

凋落の能樂師—序

小野 芳朗

七月八—九日

人文研夏期講座

京都の「公的記憶」と「共同體  
の記憶」

小林 丈廣

近代京都名勝考—京都の森林

風致—

丸山 宏

近代京都と國風文化・安土桃

山文化

都市の計畫と京都イメージの

高木 博志

變遷—明治・大正・昭和の三

断面

伊從 勉

七月三〇日

柳田國男生誕一三〇周年記念

シンポジウム「京都で讀む柳田

國男」(柳田國男の會と共催)

京都でまなんだ柳田國男

加藤 秀俊

主な登場人物—京都で柳田國

男と民俗學を考へてみる—

菊地 曉

三つ子に鮎鮎—昭和七年・京

都における民俗學/土俗學に

ついて—

土居 浩

戦後京都學派における柳田國

男の受容について

鶴見 太郎

文化史學と民俗學

林 淳

コメント—

小林 丈廣

コメント二

佐藤 健二

九月一七—一八日

エクスカーション

福

知山市、加悦町

高久嶺之介

日向 進

研究報告

關戸未帆子

九月三〇日

エクスカーション

西本願寺、

宇佐美松鶴堂

一〇月一五日

五二會品評會からみた明治期

京都の産業

宇佐美尙穗

茨木キリシタン遺物の發見

高木 博志

十一月一九日

近代京都の建碑と史蹟創出—

「三宅安兵衛遺志」碑と京都市

教育會建立碑

中村 武生

京都大學における「學徒出陣」

—京都大學大學文書館におけ

る調査より—

西山 伸

遷都千百年紀念祭と府縣連合

事業—明治中期における國民

祭典の構造と歴史的環境—

鈴木 榮樹

昭和典禮にみる京都の觀光行

政

工藤 泰子

個人研究

人文學研究部

フランスの詩學

宇佐美 齊

近代日本文明史的研究

横山 俊夫

近代東アジアにおける日本の法と政治

山室 信一

フランス革命と近代的主體の成立

富永 茂樹

近代朝鮮の政治と社會

水野 直樹

在日米軍を中心とする軍事共同體の人類學的研究

田中 雅一

文學理論の研究

大浦 康介

ヴェーダ文獻の生成と傳承の研究

藤井 正人

人種・エスニシティ論

竹澤 泰子

戦前期日本の工業化と華僑ネットワーク

籠谷 直人

近代天皇制の文化史的研究

高木 博志

近代日本の藝術と西洋

高階繪里加

現代社會における生物學・生命科学

加藤 和人

音樂におけるロマン派とメロドラマ的音樂

岡田 曉生

一九世紀末イギリスのポピュラー・コンサヴァティズム

小關 隆

南アジアの歴史人類學

田邊 明生

近世ヨーロッパの歴史叙述と政治思想

王寺 賢太

幕末期の畿内・近國社會

岩城 卓二

南アジア・ムスリム社會の社會構造

小牧 幸代

近代日本民俗誌システムの研究

菊地 曉

近世ヨーロッパの國際金融研究

坂本優一郎

近代西洋醫學發展史研究および身體論

田中祐理子

ナチス・ドイツの農業政策

藤原 辰史

近代日本における教育/教化/宗教の關係史

谷川 穰

近代朝鮮在住日本人社會の研究

李 昇燁

身體技法の認識論

倉島 哲

近代詩の虛構性

久保 昭博

東方學研究部

中國の小説、演劇及び説唱文學の歴史

中國美術の様式と意味

金 文京

中國建築の様式・技法・空間

曾布川 寛

近代中國の綿紡織業

田中 淡

道教思想研究

森 時彦

敦煌寫本の言語史的研究

麥谷 邦夫

中國古代中世の法制

高田 時雄

清代の文化と社會

富谷 至

中國科學の思想的考察

井波 陵一

近代中國の財政と社會

武田 時昌

先秦時代の金文

岩井 茂樹

古代中國の考古學研究

淺原 達郎

川西走廊の漢藏諸語の記述言語學的研究

岡村 秀典

インド・中國における佛教の學術と實踐

池田 巧

文字コード理論

船山 徹

イスラーム東漸史の研究

安岡 孝一

佛教研究知識ベース——禪佛教を例として

稲葉 穰

ウィットテルン、クリスティアン

石川 禎浩

中國共產黨史の研究

宮宅 潔

秦漢時代の制度史

宮宅 潔

清代の道教龍門派の歴史及び内丹の研究

宮宅 潔

高麗官僚制度研究

矢木 毅

中國近世の國家支配の研究

古松 崇志

文字定義情報に基づく文書表現系に關する研究

守岡 知彦

客家語およびその周邊言語の記述研究

守岡 知彦

中國佛教繪畫の研究

中西 裕樹

中國古代中世の官制史

大原 嘉豐

モンゴル時代の文化政策と出版活動

藤井 律之

中國魏晉南北朝志怪の成立背景

宮 紀子

明代後期北虜南倭時代の中國社會

佐野 誠子

中國家具とその使用に關する研究

山崎 嶽

中國唐宋の文學批評

高井たかね

中國唐宋初禪思想研究

永田 知之

齋藤 智寛

齋藤 智寛

齋藤 智寛

齋藤 智寛

事業概況

第一回 TOKYO 漢籍 SEMINAR

二〇〇五年三月二十二日

於 學術総合センター(千代田區一ツ橋)

「書寫の文化史」 冨谷 至

「漢譯佛典の成立」 船山 徹

「使えない字—諱と漢籍」 井波 陵一

退職記念講演會

二〇〇五年三月十七日 於 本館大會議室

漢字の誕生 教授 小南 一郎

古代シュメールの土地制度 教授 前川 和也

一枚の粘土板からなにが読みとれるか—

夏期公開講座

二〇〇五年七月 於 本館大會議室

古都イメージの近代と現實

八日 京都の「公的記憶」と「共同體の記憶」

京都市歴史資料館主任 小林 丈廣

近代京都名勝考—京都の森林風致—

名城大學教授・人文科學研究所客員教授 丸山 宏

九日 近代京都と國風文化・安土桃山文化

高木 博志

都市の計畫と京都イメージの變遷

—明治・大正・昭和の3斷面—

人間・環境學研究科教授 伊從 勉

開所七六周年記念公開講演會

二〇〇五年一月四日 於 本館大會議室

界面としてのキャラクター 守岡 知彦

ピアニストになりたい!—練習曲の思想と—

九世紀— 岡田 暁生

雲岡石窟寺の考古學研究 岡村 秀典

漢字情報研究センター講習會

・二〇〇五年度漢籍擔當職員講習會(初級)

第一日(一〇月三日) 漢籍について

東京大學東洋文化研究所教授 大木 康

漢籍目錄の構造—漢籍整理の基礎

文學研究科助教授 宇佐美文理

カードの取り方—漢籍整理の實踐

山崎 嶽

第二日(一〇月四日) 工具書について

漢籍目錄カード作成實習 藤井 律之

第三日(一〇月五日) 文字コードとテキスト處理の歴史

ウィットテルン、クリスティアン 日鏡檢索とデータベース検索 安岡 孝一

漢籍データベースについて 高田 時雄

漢籍データ入力實習(一)

第四日(一〇月六日) 漢籍目錄を讀む

千葉大學文學部助教授 古勝 隆一

漢籍データ入力實習(二)

漢籍データベース

國立情報學研究所教授 宮澤 彰

實習解說 梶浦 晉

・二〇〇五年度漢籍擔當職員講習會(中級)

第一日(十一月七日) 四部分類概説

中國目錄學史(一) 宮宅 潔

諸子百家から子部書へ 武田 時昌

叢書—漢籍分類の特色 梶浦 晉

第二日(十一月八日) 中國の寫本について

中國目錄學史(二) 滋賀醫科大學醫學部助教授 辻 正博

第五日(二〇月七日)

NII總合目錄データベースと全國漢籍

データベース

現代中國書について 横濱國立大學大学院國際社會科學研究科 助教授 村上 衛

漢籍データベース

朝鮮の漢籍について 矢木 毅

中國目錄學史(三)

漢籍データ入力實習(二)

第三日(十一月九日) 叢書と漢籍データベース

漢籍データ入力實習(一) 安岡 孝一

第四日(十一月一〇日) 現代中國書について

漢籍データベース

第五日(十一月十一日) 『東洋學文獻類目』について

漢籍データ入力實習(三)

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

漢籍データベース

所員 動靜

富山大學人文學部助教授 森賀 一恵  
 實習解説 梶浦 晉

- 。王寺賢太氏を助教授(人文學研究部)に採用(一月一日付)。
- 。小南一郎教授(東方學研究部)は定年により退職(三月三十一日付)。
- 。前川和也教授(人文學研究部)は定年により退職(三月三十一日付)。
- 。眞下裕之助手(東方學研究部)は辭任の上(三月三十一日付)、神戸大學文學部助教授に就任。
- 。村上衛助手(東方學研究部)は辭任の上(三月三十一日付)、横濱國立大學大学院國際社會科學研究科助教授に就任。
- 。金文京教授(東方學研究部)を當研究所長(四月一日)〜二〇〇七年三月三十一日)及び附屬漢字情報研究センター長(四月一日)〜九月三〇日)に併任。
- 。横山俊夫教授(人文學研究部・大学院地球環境學堂 兩任)は副學長ならびに國際交流推進機構長に併任(四月一日付)。
- 。岩城卓二大阪教育大學助教授を助教授(人文學研究部)に採用(四月一日付)。
- 。竹澤泰子助教授(人文學研究部)は當研究所教授(人文學研究部)に昇任(四月一日付)。
- 。岡村秀典助教授(東方學研究部)は當研究所教授(東方學研究部)に昇任(四月一日付)。

- 。永田知之氏を助手(附屬漢字情報研究センター)に採用(五月一日付)。
- 。齋藤智寬東北大學大学院文學研究科助手を助手(附屬漢字情報研究センター)に採用(八月一日付)。
- 。森本淳生助手(人文學研究部)は辭任の上(八月三十一日付)、一橋大學大学院言語社會研究科助教授に就任。
- 。森時彦教授(東方學研究部)を附屬漢字情報研究センター長に併任(一〇月一日)〜二〇〇七年三月三十一日)。
- 。久保昭博氏を助手(人文學研究部)に採用(二月一日付)。
- 。池田巧助教授(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、二〇〇四年二月二四日大阪發、香港城市大學及び西南民族大學に於いて東チベットの地名と民族語の分布に関する研究打合せ及び資料収集を行い、一月三日歸國。
- 。岩井茂樹教授(東方學研究部)は、一月六日大阪發、中國人民大學で開催の中日學者清史研究座談會に於いて學術報告を行い、一月八日歸國。
- 。池田巧助教授(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、一月六日大阪發、中央民族大學藏學研究中心に於いてムニャ語及びカム方言の記述調査を行い、一月二二日歸國。
- 。高田時雄教授(東方學研究部)は、文部科學省

- 研究據點形成費補助金により、一月一七日大阪發、中央研究院歷史語言研究所に於いて唐代ナリッジベースに關する打合せ及び若手研究者の實習打合せを行い、一月一九日歸國。
- 。山室信一教授(人文學研究部)は、一月一八日大阪發、成均館大學校に於いて國際シンポジウム「東アジア近代知性の東アジア認識」に出席・講演を行い、一月二二日歸國。
- 。高田時雄教授(東方學研究部)は、文部科學省研究據點形成費補助金により、一月二〇日大阪發、中國國家圖書館に於いて日中共同ワークショップ「漢字文獻資料庫の新技術」に出席及び研究打合せを行い、一月二四日歸國。
- 。ウィッチェルン、クリスティアン助教授(附屬漢字情報研究センター)は、文部科學省研究據點形成費補助金により、一月二〇日大阪發、中國國家圖書館に於いて日中共同ワークショップ「漢字文獻資料庫の新技術」に出席及び報告を行い、一月二四日歸國。
- 。安岡孝一助教授(附屬漢字情報研究センター)は、文部科學省研究據點形成費補助金により、一月二〇日大阪發、中國國家圖書館に於いて日中共同ワークショップ「漢字文獻資料庫の新技術」に出席及び報告を行い、一月二四日歸國。
- 。守岡知彦助手(附屬漢字情報研究センター)は、文部科學省研究據點形成費補助金により、一月二〇日大阪發、中國國家圖書館に於いて日中共同ワークショップ「漢字文獻資料庫の新技術」に出席及び研究打合せを行い、一月二四日

歸國。

。山崎嶽助手(附屬漢字情報研究センター)は、文部科省研究據點形成費補助金により、一月二〇日大阪發、中國國家圖書館に於いて日中共同ワークショップ「漢字文獻資料の新技術」に出席及び研究打合せを行い、一月二四日歸國。

。竹澤泰子助教授(人文學研究部)は、一月一九日成田發、ハーヴァード大學に於いて人種に関する資料収集及び研究打合せを行い、一月二六日歸國。

。田中雅一教授(人文學研究部)は、文部科省科學研究費補助金により、一月一五日大阪發、國立シンガポール大學に於いてインド系質屋の研究及び文獻収集・調査を行い、一月三〇日歸國。

。田中祐理子助手(人文學研究部)は、文部科省科學研究費補助金により、一月二五日日大阪發、ロンドン大學に於いて一九世紀微生物學研究に關する資料収集を行い、一月三一日歸國。

。ウィッテルン、クリスティアン助教授(附屬漢字情報研究センター)は、文部科省研究據點形成費補助金により、一月二五日日大阪發、中華佛學研究所及び中華電子佛典協會に於いて唐代ナリッジベースについての研究打合せを行い、二月一日歸國。

。水野直樹教授(人文學研究部)は、一月二九日日大阪發、ソウル大學に於いて韓國社會史學會特別シンポジウムに出席及び資料調査、國家記録

院に於いて資料調査を行い、二月五日歸國。

。金文京教授(東方學研究部)は、文部科省科學研究費補助金により、二月三三日大阪發、ソウル大學圖書館に於いて中國學關係資料調査、韓國精神文化研究院に於いて韓國寓言文學會二〇〇五年度東亞國際學術大會に出席及び論文發表を行い、二月二六日歸國。

。山室信一教授(人文學研究部)は、二月二二日日大阪發、ミャンマーに於いて「アジアにおける記憶遺跡と調査活動」についての調査を行い、二月二七日歸國。

。竹澤泰子助教授(人文學研究部)は、二月二二日日成田發、ブルックリンズ研究所、ニューヨーク州立大學及びハーヴァード大學に於いてアジア系アメリカ人研究者の對アジア意識に關するインタビュー調査を行い、三月一日歸國。

。守岡知彦助手(附屬漢字情報研究センター)は、文部科省研究據點形成費補助金により、二月二七日日大阪發、中國國家圖書館及び北京新世紀日航飯店に於いて日中共同ワークショップ「漢字文獻資料の新技術」に出席及び研究打合せを行い、三月四日歸國。

。高田時雄教授(東方學研究部)は、文部科省科學研究費補助金により、二月二六日日大阪發、プロイセン財團國立圖書館及びオーストリア國立圖書館に於いてヨーロッパ現存中國學資料収集及び調査を行い、三月五日歸國。

。麥谷邦夫教授(東方學研究部)は、文部科省科學研究費補助金により、三月一日大阪發、中

山大學に於いて江南道教に關する研究打合せ、雲南省社會科學院等に於いて道教遺跡の調査及び資料蒐集を行い、三月六日歸國。

。金文京教授(東方學研究部)は、文部科省科學研究費補助金により、三月三日大阪發、中國國家圖書館に於いて中國近世出版資料調査を行い、三月六日歸國。

。森本淳生助手(人文學研究部)は、文部科省科學研究費補助金により、三月一日大阪發、フランス國立圖書館及びクレルモン・フェラン大學に於いてヴァレリー「若きバルク」に關する資料調査を行い、三月二三日歸國。

。田邊明生助教授(人文學研究部)は、文部科省科學研究據點形成費補助金により、三月一日大阪發、ヤンゴン大學に於いて國際會議「イワラジデルタにおける村民の暮らしと農業環境の變容」に出席及びバガン佛教遺跡視察を行い、三月一六日歸國。

。眞下裕之助手(東方學研究部)は、文部科省科學研究費補助金により、三月三三日大阪發、パンジャブ大學圖書館に於いて前近代インドにおけるイスラーム諸國家制度の動態的研究に關する文獻調査及び資料収集を行い、三月九日歸國。

。小牧幸代助手(人文學研究部)は、文部科省科學研究費補助金により、三月五日大阪發、イスラミーヤ大學、パンジャブ大學及び政策學研究所等に於いて「インド北・西部における都市型祭禮の變容に關する文化人類學的研究」

に關する現地調査・文獻調査を行い、三月二〇日歸國。

。高井たかね助手(附屬漢字情報研究センター)は、文部科學省研究據點形成費補助金により、三月一〇日大阪發、蘭州市、西寧市、張掖市、酒泉市及び敦煌市等に於いて壁畫、唐代佛教美術及び唐代城址に關する調査を行い、三月二二日歸國。

。籠谷直人助教授(人文學研究部)は、日本學術振興會受託研究費により、三月一八日大阪發、香港大學に於いて第二六回人類學研究會に出席し、三月二二日歸國。

。船山徹助教授(東方學研究部)は、三月一四日大阪發、中華佛學研究所に於いてインド佛敎史に關する研究打合せを行い、三月三日歸國。

。金文京教授(東方學研究部)は、三月二四日大阪發、漢陽大學に於いて韓國中國語學國際會議に出席及び論文發表を行い、三月二五日歸國。

。中西裕樹助手(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、三月二二日大阪發、廣東省海豐縣に於いてシヨオ語の記述調査及び資料収集を行い、三月二七日歸國。

。横山俊夫教授(人文學研究部)は、三月二一日大阪發、平成一六年度文部科學省「科學技術國際協力の總的推進(派遣)事業」により、ケンブリッジ大學・環境研究イニシアティブ(CEI)主催、「氣候變動特別セミナー」に参加、意見交換を行い、三月三〇日歸國。

。岡村秀典助教授(東方學研究部)は、三月二七

日福岡發、旅順博物館に於いて遼東の遺跡調査を行い、三月三一日歸國。

。金文京教授(東方學研究部)は、四月五日大阪發、香港城市大學に於いて講演を行い、四月一日歸國。

。陳慶浩客員教授は、四月八日大阪發、臺灣國立嘉義大學に於いて第二屆中國小說戲曲國際學術研討會に出席し、四月二一日歸國。

。武田時昌教授(附屬漢字情報研究センター)は、四月二四日大阪發、ラディソン・ソウルプラザホテルに於いて「日韓科學史・儒學史比較研究」研究會議に出席し、四月二八日歸國。

。ウィッテルン、クリスティアン助教授(附屬漢字情報研究センター)は、四月二五日大阪發、ハイデルベルグ科學院に於いてワークショップ「中國石刻佛典」に出席、フランス規格協會に於いてTEI評議委員會に出席し、五月二日歸國。

。古松崇志助手(東方學研究部)は、文部科學省研究據點形成費補助金により、五月一日大阪發、巴林右旗博物館、内蒙古文物考古研究所及び中國國家圖書館等に於いて遺跡・文物調査、研究打合せを行い、五月二一日歸國。

。曾布川寛教授(東方學研究部)は、五月一〇日大阪發、臺灣大學藝術史研究所に於いて外部評價、中央研究院歷史語言研究所及び故宮博物院に於いて美術資料蒐集を行い、五月一四日歸國。

。矢木毅助教授(東方學研究部)は、文部科學省

科學研究費補助金により、五月二一日大阪發、スウェーデン王立アカデミーに於いてワークショップ「東アジアにおける死刑」に出席し研究發表を行い、五月二七日歸國。

。富谷至教授(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、五月一〇日大阪發、スウェーデン王立アカデミーに於いてワークショップ「東アジアにおける死刑」に出席し研究發表を行い、五月一九日歸國。

。竹澤泰子教授(人文學研究部)は、文部科學省海外先進教育研究實踐支援プログラム補助金により、三月三〇日成田發、ハーヴァード大學に於いて人種に關する資料収集及び研究打合せを行い、五月二〇日歸國。

。田中祐理子助手(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、五月二五日大阪發、パリ・パスツール研究所に於いて微生物學研究に關する資料調査を行い、六月四日歸國。

。ウィッテルン、クリスティアン助教授(附屬漢字情報研究センター)は、文部科學省研究據點形成費補助金により、六月一三日大阪發、ヴィクトリア大學に於いてACH/ALIC二〇〇五年度共同年會に出席及び研究發表を行い、六月二〇日歸國。

。高田時雄教授(東方學研究部)は、文部科學省研究據點形成費補助金により、六月二三日大阪發、上海社會科學院に於いて「古代内陸アジアと中國文化國際學術研討會」に出席及び漢字文



。獻の調査を行い、六月二七日歸國。

。佐野誠子助手（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、六月二六日大阪發、南京博物院、復旦大學及び上海博物館に於いて中國南朝宗教資料の調査を行い、六月三〇日歸國。

。宮紀子助手（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、七月一日大阪發、臺灣國家圖書館及び故宮博物院に於いて『元史』の志と表の再編纂の研究に關する調査及び資料収集を行い、七月八日歸國。

。田邊明生助教授（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金及び京都大學教育研究振興財團助成金により、三月二二日大阪發、インド、ジャワハルラル・ネルー大學に於いて國際會議に出席、國立文書館に於いて「南アジア近代における『民主主義と開發』の歴史的研究、ウトカル大學等に於いて「自由とタルマの人類學・現代インドにおける地域倫理の模索」研究を行い、七月一〇日歸國。

。高田時雄教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、七月三日大阪發、ロシア國立アカデミー東方學研究所、ベルブルグ支所に於いて漢字文獻の調査及び敦煌學國際連絡委員會幹事會に出席し、七月一〇日歸國。

。森本淳生助手（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、六月二四日大阪發、フランス國立圖書館、國際文化センター及びク

レルモン・フェラン大學に於いてポール・ヴァレリーに關する資料調査及び研究發表等を行い、七月一日歸國。

。エスポジト、モニカ助教授（東方學研究部）は、七月二三日大阪發、臺灣中央研究院に於いて道教プロジェクトに關する研究打合せを行い、七月二五日歸國。

。ウィッテルン、クリスティアン助教授（附屬漢字情報研究センター）は、七月一八日大阪發、中華佛學研究所及び中華電子佛典協會に於いてワークショップ、デジタル・テキストのためのプログラミングに出席及び研究打合せを行い、七月二七日歸國。

。藤原辰史助手（人文學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、七月一八日大阪發、ベルリン、リヒターフェルテ連邦文書館に於いてナチス期農業政策に關する資料収集を行い、八月七日歸國。

。岡村秀典教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、八月五日大阪發、陝西省考古研究所に於いて遺跡の考古學的調査を行い、八月二二日歸國。

。高田時雄教授（東方學研究部）は、八月九日大阪發、大英圖書館及びプロイセン國立圖書館に於いて奈良平安古寫經及び關連文獻調査を行い、八月一八日歸國。

。池田巧助教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、七月二三日大阪發、中央民族大學、西南民族大學、寧夏大學及び康

定近郊に於いて木雅語及びカム方言の記述調査を行い、八月二四日歸國。

。金文京教授（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、八月一七日大阪發、首都師範大學に於いて中國古代小説文獻與數字化國際研討會及び明代文學與文化國際學術研討會に参加・論文發表を行い、八月二四日歸國。

。水野直樹教授（人文學研究部）は、八月二一日大阪發、上海に於いて第四回アジア研究者世界大會に参加・發表及び資料調査を行い、八月二六日歸國。

。中西裕樹助手（東方學研究部）は、文部科學省科學研究費補助金により、八月七日大阪發、香港中文大學及び海豐縣誌辨公室に於いてショオ語の現地調査及び資料収集を行い、八月二七日歸國。

。李昇燁助手（人文學研究部）は、八月一四日大阪發、ソウル國立中央圖書館、國史編纂委員會及び韓國學中央研究院に於いて日本外務省の朝鮮人官僚研究及び植民地居住者の帝國議會請願事項に關する研究のための資料調査を行い、八月二七日歸國。

。船山徹助教授（東方學研究部）は、京都大學教育研究振興財團助成金等により、八月二〇日大阪發、ウィーン大學に於いて八世紀のインドの佛教認識論における宗教的側面に關する研究發表及び資料収集を行い、八月三〇日歸國。

。山室信一教授（人文學研究部）は、文部科學省

科學研究費補助金により、八月二三日大阪發、ゴビ自然博物館、モルツォク砂丘に於いてゴビ砂漠地域における空間構成・生業の態様とその展示方法の調査、ウランバートルに於いて都市部・草原地域における空間認識及びモンゴル・東アジアの政治思想史に關する史跡調査を行い、八月三〇日歸國。

。菊地 曉助手(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、八月二三日大阪發、ゴビ自然博物館、モルツォク砂丘に於いてゴビ砂漠地域における空間構成・生業の態様とその展示方法の調査、ウランバートルに於いて都市部・草原地域における空間認識及びモンゴル・東アジアの政治思想史に關する史跡調査を行い、八月三〇日歸國。

。谷川 穰助手(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、八月二三日大阪發、ゴビ自然博物館、モルツォク砂丘に於いてゴビ砂漠地域における空間構成・生業の態様とその展示方法の調査、ウランバートルに於いて都市部・草原地域における空間認識及びモンゴル・東アジアの政治思想史に關する史跡調査を行い、八月三〇日歸國。

。坂本優一郎助手(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、八月一六日大阪發、大英圖書館及びギルドホール圖書館に於いてイギリス財政革命の社會的影響に關する史料調査を行い、八月三二日歸國。

。古松崇志助手(東方學研究部)は、八月一九日

大阪發、新疆ウイグル自治區イリ川流域等に於いて歴史・考古・自然環境のフィールド調査を行い、九月三日歸國。

。横山俊夫教授(人文學研究部)は、八月二六日大阪發、ウィーン大學に於いて第一一回ヨーロッパ日本研究者協會總會にて基調講演を行い、九月五日歸國。

。石川禎浩助教授(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、八月二三日大阪發、荊州(湖北省)に於いて中國近現代史關係の實地調査及び資料調査を行い、北京市檔案館等に於いて中國社會主義文化についての資料調査を行い、九月六日歸國。

。森時彦教授(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、八月三日大阪發、武漢、荊州、常州、上海等に於いて中國縣制に關する現地調査及び資料調査を行い、九月六日歸國。

。小關隆助教授(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、八月二九日大阪發、アイルランド國立圖書館に於いて「一九世紀末イギリスのポピュラー・コンサヴァティズム」に關わる史料調査を行い、九月八日歸國。

。稻葉穰助教授(東方學研究部)は、八月一六日大阪發、イランにおける前イスラーム期遺跡群共同學術調査を行い、九月九日歸國。

。大原嘉豐助手(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、九月一日大阪發、杭州、湖州、蘇州及び上海に於いて中國佛教美術

資料調査を行い、九月二日歸國。

。岩井茂樹教授(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、九月二三日大阪發、無錫市及び上海市内に於いて中國縣制の研究にかかわる實地調査及び資料収集を行い、九月一八日歸國。

。森時彦教授(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、九月一三日大阪發、無錫市及び上海市内に於いて中國縣制の研究にかかわる實地調査及び資料収集を行い、九月一八日歸國。

。エスポジト、モニカ助教授(東方學研究部)は、八月二〇日大阪發、コレージュ・ド・フランス圖書館に於いて道藏輯要計畫調査を行い、九月二六日歸國。

。宮紀子助手(東方學研究部)は、文部科學省研究據點形成費補助金により、九月一九日大阪發、遼寧省文物考古研究所、遼寧省博物館等に於いて遼寧省における遼文化の歴史・現狀・環境に關する學術調査を行い、九月二六日歸國。

。古松崇志助手(東方學研究部)は、文部科學省研究據點形成費補助金により、九月一九日大阪發、遼寧省文物考古研究所、遼寧省博物館等に於いて遼寧省における遼文化の歴史・現狀・環境に關する學術調査を行い、九月二六日歸國。

。大原嘉豐助手(東方學研究部)は、文部科學省研究據點形成費補助金により、九月一九日大阪

發、遼寧省文物考古研究所、遼寧省博物館等に於いて遼寧省における遼文化の歴史・現状・環境に関する學術調査を行い、九月二六日歸國。

。ウィッテルン、クリスティアン助教(附屬漢字情報研究センター)は、九月二五日大阪發、オックスフォード大學に於いてTEIワーキング・グループ會議に出席及び研究打合せを行い、九月三日歸國。

。大浦康介教授(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、九月二三日大阪發、フランス社會科學高等研究院及びフランス國立圖書館に於いてフィクション研究のための資料調査及び研究打合せを行い、一〇月三日歸國。

。倉島哲助手(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、九月二八日成田發、フランス外務省國際會議センターに於いてアジア・ネットワーク第二會議に出席・研究報告を行い、一〇月三日歸國。

。池田巧助教授(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、一〇月一日大阪發、大英圖書館及びフランス國立圖書館に於いてナム語文獻調査を行い、一〇月一四日歸國。

。岡村秀典教授(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、一〇月一七日大阪發、西安、洛陽、邯鄲等に於いて北魏時代の遺跡と出土遺物の調査を行い、一〇月三〇日歸國。

。藤井律之助手(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、一〇月二〇日大阪發、西安、洛陽、邯鄲等に於いて北魏時代の遺跡と出土遺物の調査を行い、一〇月三〇日歸國。

。加藤和人助教(人文學研究部)は、一〇月二三日大阪發、ソルトレイクシティに於いて第八回國際HapMap會議及び米國人類遺傳學會に出席し、一〇月三一日歸國。

。中西裕樹助手(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、一〇月二六日大阪發、廈門大學に於いて第三八回國際漢藏語學術研討會に出席し、十一月二日歸國。

。BEZLER, Eva 外國人研究員は、十一月一日大阪發、香港大學日本研究所に於いて口述試驗等を行い、十一月三日歸國。

。ウィッテルン、クリスティアン助教(附屬漢字情報研究センター)は、一〇月二六日大阪發、ブルガリア科學院に於いてTEIメンバーミーティングに出席、ハイデルベルグ科學院に於いて石刻佛典のデジタル化についての研究打合せを行い、十一月六日歸國。

。山室信一教授(人文學研究部)は、十一月二日大阪發、ソウル大學に於いて講演及び國際シンポジウム「國際政治と東アジア」参加を行い、十一月六日歸國。

。岡田曉生助教(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、十一月九日大阪發、フイレンチェ音楽院圖書館及びヴェネチア

音楽院圖書館に於いて一九世紀オペラに関する資料調査を行い、十一月五日歸國。

。安岡孝一助教(附屬漢字情報研究センター)は、文部科學省研究費補助金(一部先方負擔)により、十一月二二日大阪發、上海師範大學に於いて敦煌學知識庫國際學術研討會に出席し、十一月五日歸國。

。高田時雄教授(東方學研究部)は、文部科學省研究費補助金(一部先方負擔)により、十一月九日大阪發、香港大學に於いて第五次中文獻資源共建共享會議に出席、上海師範大學に於いて敦煌學知識庫國際學術研討會に出席し、十一月六日歸國。

。田中雅一教授(人文學研究部)は、十一月九日大阪發、シンガポール・アジア文明博物館に於いて身體資源及び性の表象についての調査を行い、十一月二日歸國。

。小牧幸代助手(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、十一月六日大阪發、デリーに於いてムスリム聖者ニザームディーンの墓廟における聖者祭の調査を行い、十一月二七日歸國。

。BEZLER, Eva 外國人研究員は、十一月二日大阪發、ルンド大學に於いて文化人類學に関する會議に出席、マルモ大學に於いて講演を行い、十一月二八日歸國。

。田中雅一教授(人文學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、十二月二日大阪發、ゴアにおいて薬用植物の生産、流通、消費につ

いての調査、國際會議「贈與交換經濟における貨幣資源の浸透」に出席及び發表を行い、二月二一日歸國。

中西裕樹助手(東方學研究部)は、文部科學省科學研究費補助金により、二月二二日大阪發、廣西民族學院に於いて瀕危語言國際學術研討會に出席し、二月二五日歸國。

高田時雄教授(東方學研究部)は、文部科學省研究據點形成費補助金により、二月二四日大阪發、臺灣國家圖書館に於いて漢籍データベースの相互乗り入れに關する研究打合せを行い、二月二七日歸國。

山崎 嶽助手(附屬漢字情報研究センター)は、文部科學省科學研究費補助金により、二月一九日大阪發、温州・福建沿海地域に於いて東アジア海域交流史關連史跡の現地調査を行い、二月二八日歸國。

外國人研究員

。DOMET, Christian パリ第八大學教授  
ヴィクトル・セガレンの「エグジティスム」と文化交流  
(文化生成研究客員部門)

受入教員 大浦教授  
期間 三月一日〜六月三十日

。CHAN, Hing Ho フランス國立科學センター研究員  
二十世紀以前東アジア國際往來者漢文資料の整理と研究

(文化連關研究客員部門)

受入教員 高田教授  
期間 三月一日〜八月三十一日

。安 承俊 韓國學中央研究院專門委員  
東アジア古文書學の比較研究  
(文化生成研究客員部門)

受入教員 金教授

期間 七月七日〜二〇〇六年一月六日  
。BENZARI, Eyal エルサレム・ヘブライ大學教授  
自衛隊の文化人類學的研究  
(文化連關研究客員部門)

受入教員 田中雅一教授

期間 九月七日〜二〇〇六年三月一日  
招聘外國人學者  
。王 建軍 西北大學應用社會學部教授  
清末中國留日學生と近代中國政治

受入教員 森教授

期間 二月二日〜八月一日  
。KIMBURG-SALTER, Deborah ウィーン大學藝術史研究所教授  
五―九世紀アフガニスタンの考古美術的研究

受入教員 稻葉助教授

期間 三月一日〜三月二十八日  
。蔡 哲茂 中央研究院歷史語言研究所副研究員  
京都大學人文科學研究所藏甲骨文研究

受入教員 高田教授

期間 四月一日〜五月九日

。安 承俊 韓國學中央研究院 專門委員  
東アジア古文書學の比較研究

受入教員 金教授

期間 四月十五日〜七月六日  
。陳 金華 カナダ・ブリティッシュコロンビア大學助教授  
唐代佛教における法藏の歴史的位置づけ

受入教員 船山助教授

期間 四月二〇日〜六月八日  
。池上 英子 ニュー・スクール大學大學院教授  
祇園祭の歴史社會學的研究

受入教員 高木助教授

期間 五月二七日〜七月二七日  
。蔡 榮婷 國立中正大學中國文學系教授  
唐宋時期禪宋詩偈の研究

受入教員 高田教授

期間 七月二〇日〜八月五日  
。黃 蘭翔 中央研究院臺灣史研究所副研究員  
六朝時代における佛教伽藍に示された中國的空間秩序

受入教員 田中淡教授

期間 八月一日〜九月三〇日  
。賴 惠敏 中央研究院近代史研究所研究員  
中國清代の地方財政の研究

受入教員 岩井教授

期間 八月二日〜九月一日  
。外村 中 ヴェルツブルク大學東方文化研究

所講師

中國を中心とする東アジア造園史の研究

受入教員 田中淡教授

期間 八月二日～九月一日

。金 海明 延世大學校文化大學教授

平安時代雅樂と唐詩の關係

受入教員 高田教授

期間 九月一日～二〇〇六年八月三日

。阿 風 中國社會科學院歷史研究所副研究員

中國明清時代における法律・裁判文書の研究

受入教員 岩井教授

期間 九月二日～二月一日

。PREGADIO, Fabrizio スタンフォード大學

宗教學部・代行助教授

道藏輯要および内丹理論に関する研究

受入教員 麥谷教授

期間 一〇月一日～二〇〇六年二月二日

。李 匡梯 中央研究院歷史語言研究所副研究員

東アジアの環境と生業をめぐる人文情報學的研究

受入教員 岡村教授

期間 一〇月一九日～十一月八日

。陳 金華 カナダ・ブリティッシュコロロンビア大學助教授

唐代舍利信仰の研究

受入教員 船山助教授

期間 一〇月二〇日～二月五日

。WANG, Ding ベルリン・ブランデンブルク

彙報

科學院非常勤研究員

中央アジア版刻史の研究

受入教員 高田教授

期間 一月三日～二〇〇六年一月二日

。GUMBRECHT, Cordula ドイツ國立圖書館

東アジア部主任

吐魯番探検隊の研究―ドイツ隊と大谷隊

受入教員 高田教授

期間 一月三日～二〇〇六年一月二日

。桑 兵 中山大學歴史系教授

二〇世紀初の東アジアにおける人文情報

受入教員 石川助教授

期間 一月一日～一月十九日

。LEE Pui Tak 香港大學アジア研究センター

助教授

アジア・ネットワークのなかの近代日本・香港・上海の金融と關係して

受入教員 籠谷助教授

期間 二月三日～二〇〇六年三月二日

外國人共同研究者

。梁 仁實

日本の視覚メディアにおける「朝鮮」表象

受入教員 水野教授

期間 四月一日～二〇〇六年三月三十一日

。劉 思妙 中華佛學研究所助理研究員

インド中觀派のチャンドラキールティによる

緣起思想

受入教員 船山助教授

期間 七月二日～八月二十五日

。VOLKINSFELD, Sven シュンスター大學中國學研究所非常勤講師

Methodologies for computerized processing

of classical Chinese texts

受入教員 ウィッテルン助教授

期間 九月二日～十一月五日

。鞏 文 中國社會科學院考古研究所助理研究員

三～六世紀の裝身具からみた東アジアの文化交流

受入教員 岡村教授

期間 二月一日～二〇〇六年三月一日

外國人研究生

。NAM, Paul Sangwoon

植民地期朝鮮における資本主義の展開

受入教員 水野教授

期間 四月一日～二〇〇六年三月三十一日

。SOLOMON, Deborah

一九二九年光州學生運動の研究

受入教員 水野教授

期間 七月一日～二〇〇六年六月三〇日

。KEER, Philomena

衣服と遊ぶ 日本若者ファッション現象で

あるコスプレに見る周縁性、創造力、アイデン

ティティ

受入教員 田中雅一教授

期間 一〇月一日～二〇〇六年九月三〇日

。藤島 志麻

中國古代のイヌの社會的意義

受入教員 岡村教授

期間 一〇月一日〜二〇〇六年九月三〇日

。ODA, Ernani Shoji

在日ブラジル人と他の移民・マイノリティとの

關係に關する實證的研究

受入教員 竹澤教授

期間 一〇月一日〜二〇〇六年三月三十一日

。束 洪芬

中國北京にある家庭内暴力におけるジェン

ダー構造

受入教員 田中雅一教授

期間 一〇月一日〜二〇〇六年三月三十一日

。廖 莉莉

儒學と現代人の行為の關連

受入教員 岩井教授

期間 一〇月一日〜二〇〇六年三月三十一日

### 出版物

#### 紀要

人文學報 第九〇號(紀要第一四七册)

二〇〇四年四月三〇日刊

人文學報 第九一號(紀要第一四八册)

二〇〇四年二月二十五日刊

人文學報 第九二號(紀要第一五〇册)

二〇〇五年三月三十一日刊

東方學報 第七七册(紀要第一四九册)

二〇〇五年三月一〇日刊

東洋學文獻類目 二〇〇二年度

二〇〇五年三月二十五日刊

ZINBUN Number 三七

二〇〇五年三月刊

#### 研究報告その他

『漢籍目錄―カードのとりかた 京都大學人文科學研究所漢籍目錄カード作成要領』

二〇〇五年一月二十五日刊

『人類概念の普遍性を問う―西洋的パラダイムを越えて』(人文書院)

二〇〇五年一月二〇日刊

『中國文明の形成』(朋友書店)

二〇〇五年二月二十五日刊

『橋本氏收藏 中國書畫錄』(東方學資料叢刊第一三册)

二〇〇五年三月二〇日刊

『東洋學へのコンピュータ利用 第一六回研究セミナー』(全國文獻・情報センター人文社會科學學術情報セミナーシリーズ 京都大學學術情報メディアセンター第77回研究セミナー)

二〇〇五年三月二十五日刊

『魏晉石刻資料選注』

三國時代の出土文字資料班 井波陵一編

二〇〇五年三月三〇日刊

『身體論のすすめ』(京大人氣講義シリーズ、丸善)

共同研究班「身體の近代」・菊地曉編

二〇〇五年四月三〇日刊

『國家形成の比較研究』(學生社)

前川和也・岡村秀典編

二〇〇五年五月三〇日刊

『京都大學人文科學研究所漢籍分類一覽』(朋友書店)

二〇〇五年一月三〇日刊

漢字と情報 第一號〜第九號

二〇〇〇年一〇月二十五日〜二〇〇四年一月十五日(季刊)

漢字と情報 第一〇號

二〇〇五年三月一八日刊

漢字と情報 第一〇號別冊(島田虔次先生寄贈書目録)

二〇〇五年四月二〇日刊

漢字と情報 第一二號

二〇〇五年一〇月三〇日刊

・京都大學二一世紀COEプログラム「東アジア世界の人文情報學研究據點 漢字文化の全

き繼承と發展のために」實施報告書(據點リーダー 高田時雄)

『書體・組版ワークショップ』報告書(二〇〇三年一月二八・二九日實施)

二〇〇四年二月刊

オープン・フォーラム「漢字文化の今」報告書(二〇〇四年二月八日實施)

二〇〇四年七月刊

公開ワークショップ「唐代ナレッジベースの可能性 ― Possibilities of a Knowledgebase of Tang Civilization ―」報告書(二〇〇四年一

二〇〇四年七月刊)

二〇〇四年七月刊)

月二〇日實施)

二〇〇四年七月刊

特別講演會「中國における書物の傳統」報告書

(二〇〇四年三月一〇日實施)

二〇〇四年七月刊

二〇〇四年度東アジア人文情報學サマーセミナー報告書」(二〇〇四年九月六日～一〇日實

施)

二〇〇四年一月刊

「中國宗教文獻研究國際シンポジウム報告書

(二〇〇四年一月一八日～二一日實施)

二〇〇四年二月刊

日中共同シンポジウム「漢字文獻資料庫の新技术

術」(二〇〇五年一月二二日實施)

二〇〇五年七月刊

オープン・フォーラム「漢字文化の今」二一

東アジアの人名・地名と漢字」報告書(二〇

〇五年二月一三日實施)

二〇〇五年八月刊

漢字と文化 創刊號

二〇〇三年十二月二四日刊

漢字と文化 第一號

二〇〇四年二月二八日刊

漢字と文化 第三號

二〇〇四年六月三〇日刊

漢字と文化 特集號

二〇〇四年十一月一五日刊

漢字と文化 第四號

二〇〇五年二月二八日刊

漢字と文化 第五號

二〇〇五年六月三〇日刊

漢字と文化 第六號

二〇〇五年十一月三〇日刊